
バカと速攻と昆虫少年

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと速攻と昆虫少年

【Nコード】

N1495BA

【作者名】

榊

【あらすじ】

文月学園二年Fクラス所属、七伏博人。昆虫をこよなく愛し、昆虫少年の異名を持つ彼。そんな彼の兄や幼なじみ、そして級友達を交え、我が道を走りながらも愉快に学園生活をおくっていく。そして最近はいろいろ逃げ道がない。そんな彼の召喚獣の戦い方、それは『速攻』。

「殺られる前に殺りつづければ殲滅完了だ」

「はいはいチートチート」

駄文になりますが、お付き合いいただけると嬉しいです。偶数日の

定期更新です。

※間違えて削除してしまったため再投稿しました。

第一問

第一問

校舎へ続く道が桜に彩られる新学期。

僕は双子の兄である行平ゆきひらと幼なじみの佐藤楓さとうかへで、通称メーブルと共に坂道を登っていく。

ちなみに桜の品種のソメイヨシノは全てクローンなので、条件が揃えば同時期に咲く。そのため開花予想もできるのだ。

他愛もない雑談をしながら歩くと玄関の前に西村先生、通称鉄人が立っていた。

「「「おはようございます」」」

「ああ、お前たちか。これがクラス割だ」

そういつて渡されたのは茶色の封筒。

適当に開けると中にはFの文字、つまりこの学校の最低クラスが書いてあった。

「そっちはどうだった？」

二人に聞いてみると、Aクラスだとかえってきた。

「残念だがこれもルールだからな」

西村先生に声をかけられる。

うん、僕がFクラスなのは、ルールである以上仕方がない。

「うう：：ハクと一緒に良かったっす」

「っす」というのはメーブルの口調。

これはキャラ作りらしい。何でだろうね？

ちなみにハクというのは僕、博人のことだ。

「試召戦争、頑張って下さい」

デフォルトで丁寧なのは行平の口調だ。

紳士的な人間（腹黒）が行平の特徴といえよう。

そして二人と別れ、今Fクラスの前に立っている。

ドアを開けると、畳と卓袱台、座布団という斬新な設備の教室がひろがっていた。

ああ、今日もいい天気だなあ。

.....

.....

∴

ダメだ、この現実からは逃げられない。

えらい人は言いました。

現実がダメなら――

「∴∴∴∴∴∴∴ (読書中)」

――読書があると。

第一問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、どしどし書いてください。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第二問

第二問

しばらく現実逃避《読書》していると、僕を呼ぶ声が聞こえた。

「自己紹介をおねがいします」

いつの間にか自己紹介の順番になっていたようだ。

「七伏博人〔ななふしはくと〕です。趣味は昆虫採集です。よろしくお願いします」

席についてふたたび読書を始める。

少したってから、教室のドアが開かれた。

そこには息を切らせて胸に手を当ている女子生徒と、従姉である杉本秋音〔すぎもとあきね〕。ウチに居候中の背の低い（中学生くらい）物理教師だ。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんと杉本先生もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします：……」

つづいて秋音姉。

「私は杉本秋音。Fクラスの副担任の物理教師だよ♪よろしくね！」
その後本来Aクラスにいるはずの姫路さんが何故Fクラスにいるかという話になったが、風邪による途中退席が原因だそうだ。

僕の場合は色々あっての遅刻なんだけど。

教卓がぶっ壊れたり、なんやかんややっているうちに、最後の自己紹介になった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

坂本雄二。高身長で、タテガミのような髪が特徴の僕の悪友。

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄二は教室内の各所に目を移す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸入れて静かに告げる。

「――不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

ですよね。

そして雄二はその状況を改善するため、あることを提案した。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

第二問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第三問

第三問

Aクラスへの宣戦布告。

クラス内からも否定的な意見がでるほどAクラスとFクラスの戦力の差は明らかだ。

ここ文月学園では、上限の無いテストの点数に応じた強さの自身をデフォルトした召喚獣を使い、クラス間での戦争が行われる。

つまり、学力が最高のAクラスとFクラスでは天と地ほどの差があるということだ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

その戦力差を知りながらも、雄二は堂々と宣言した。

そして、Aクラスに勝てるという根拠をこれから説明したくれるらしい。

まず始めに呼ばれたのは畳に顔をつけて姫路さんのスカートを覗いていた土屋康太。

顔に残る畳の後を隠しながら壇上にあがる。

「こいつがあ有名なムッツリーニだ」

「……………！！（ブンブン）」

ムッツリーニ、簡単に言うともムッツリスケベだ。

ただし、そのムッツリ度は常人の比ではない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

試召戦争に至るとしたら強力な戦力となるだろう。

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。演劇部のホープで、双子の姉の木下優子が有名だ。

そして途中にキングオブバカ、吉井明久をバカにした後ぼくの名前がよばれた。

「七伏博人。こいつはこのクラスの秘密兵器といってもいい。皆も昆虫少年という名前は聞いたことがあるだろう」

『Aクラスレベルって話だよな』

『運動もすごいってきいたぜ』

『まさに秘密兵器って訳だ』

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

別に誤字ではないと思う。

明久は最初は渋っていたが、あっさり騙されて意気揚々とDクラスへ向かっていた。

「騙されたあっ！」

「やはりそうきたか」

満身創痍といった体の明久が転がり込んできたが、別に予想通りだったので特にリアクションはしなかった。

「あの程度でだまされる明久がわるかったんだよ」

さて、これで本格的にDクラスと戦争になるわけだが僕の役目は秘密兵器。

つまりなにが言いたいかっていうと、Dクラス戦では秘密兵器はズット秘密だったってことだ。

結果は、相手の代表に姫路さんが奇襲をかけておわったそうさ。

第三問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第四問

第四問

Dクラス戦が終わり、行平とメープルと一緒に帰る。

「試召戦争ご苦労様でした」

「最終目標はAクラスってどこっすか？」

「うん、そうだよ。というかいつも通りのしゃべり方でいいんじゃない？」

メープルの『くす』という口調は本人曰わくキャラ作りだそうだ。

いつもは普通の口調なんだけど、何か意味あるのかなあ？

「ねえ、それじゃあさ、ちょっと勝負してみない？」

ふむ、勝負か……。

「内容によるね」

「ハク達がAクラスに勝ったらハクの、負けたら私の言うことを聞くっていうのはどう？」

「うん、乗った」

実は結構賭事好きだったりする。

ちなみに一番好きなのはポーカーだ。

でも、わざわざ勝負を仕掛けてきてまで、僕に聞いてほしいことがあるのだろうか？

「それじゃ、また明日！」

メーブルの家の前で別れ、すぐ隣の我が家に入る。

明日は点数補充テストがあるので一通り教科書に目を通しておく。

翌朝、いつも通り学校に向かう。

今日は昨日試召戦争で消費した点数の補給テストになる。

僕としては、このテストが今後の戦力となるので少し気合いを入れてやっておく。

おそらく、雄二は強力な駒である僕を、重要な位置で使うだろう。

つまり、Fクラスの勝負は僕にかかる。

Aクラスと戦う前に負けては、約束が果たせない。

せっかくの試召戦争、楽しい戦いをしないと。

第五問

第五問

4教科のテストが終わり、昼休みとなったのでFクラスのいつものメンバーと行平とメープルを加え弁当を食べていたのだが――

ガクガクガクガクガクガク

姫路さんの弁当を食べたムツツリーニと雄二が大ダメージを負って倒れていた。

生存者で作戦会議を行い、僕は一つの結論を出した。

（僕は自分の弁当あるから、姫路さんの弁当は遠慮させてもらう）

（私もまだ死にたくないっす）

（頑張ってください）

見捨てましょう♪

（そんな！ひどいよ！）

（俺達は仲間だろ！）

明久と復活した雄二が生贄を増やそうと必死だが、無視して三人で和やかに食事を再開する。

雄二が犠牲となることで場がおさまったと思ったが、デザートがあり、秀吉がさらなる犠牲となった。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

「あれ？ 私達が聞いても良いっすか？」

「ああ、別にお前たちは大丈夫だろ。博人と戦いたいだろうしな」

「そうですね。公式の場で雌雄を決するというのも、楽しそうです」

「私が相手をするっすから、ユキは控えてていいっす」

「いえいえ、兄弟対決というのもおもしろいではありませんか？」

「まあまあ2人とも。どうなるかはわからないんだし、今は保留で良いでしょ」

姫路デザートで死にかけた秀吉に明久が大量に茶を飲ませている。確かに抗菌作用があるが、姫路さんの料理に入っているのは化学物

質だから効果は得られないだろう。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

Aクラスを目標とするのに、なぜBクラスと戦うのかという島田さんの質問だが、おそらくAクラスと有利な状況で戦うためにBクラスを利用するつもりだろう。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃには勝てやしない」

雄二らしくもない戦う前からの降伏宣言。

Aクラスの約四十人はBクラスよりも少々点数が上のふつうの生徒だ。

しかし残り10人の点数はずば抜けて高い。

Fクラスのふつうのメンバーでは全員で取り囲んでもやられてしまうだろう。

だから雄二は一騎打ちに持ち込む作戦のようだ。

Bクラスはそのため脅しの使うつもりらしい。

今回も明久がBクラスへの死者（使者）にされ、役目を果たしてボロボロになって帰ってきた。

第五問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第六問

第六問

Bクラス戦。今回はまずは防御側にまわり、雄二の護衛として掃除用具入れに隠れていた。

俺が呼ぶまで出てくるなという雄二の指示通り、ずっと。

現在、Cクラスに不穏な動きがあり、不可侵条約を結ぼうということになった。

しかし、引っかかる事がある。

Cクラスの代表とBクラスの代表が付き合っているという噂のことだ。

「雄二！不可侵条約を結ぶのに、僕も連れて行ってほしい！」

掃除用具入れの中なので、大きめの声で叫ぶ。

「……………分かった。出てこい」

意図を察してくれたのか、少し考えてから了解してくれた。

秀吉を残して、Cクラスに向かう。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

前に出てきたのは、気が強そうな女子の小山友香さんだ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根元クン？」

予想通り、教室の奥から根元恭二が現れた。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？根元君！Bクラスの君がどうしてこんなところで！」

Fクラスをはめるためです。

取り巻きも7人ほど見える。ちょうど良い。

4時までには決着がつかなかったら翌日に持ち越しという協定を盾にして、攻撃を仕掛ける……。か。残念ながら予想通りでしかないこの作戦はもう意味が無い。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚をー」

「Fクラス、七伏が受けます。試獣召喚」

雄二達を教室から逃がし、相手と向き合う。

チャンスは簡単にピンチに変わるってことをしっかり教えてあげよう。

「Bクラスの皆さん。コレだけでは役不足なので、まとめてかかってきてください」

Fクラスの生徒にバカにされたからか、簡単に挑発にのってくる。

『試獣召還！』

残りの六人も召還をし、点数が表示される。

『Bクラス モブキャラ×7

数学 平均150くらい

Fクラス 七伏博人

数学 684点』

僕の召還獣は武器は両手のクロー、足の鉤爪、肘のブレード。防具はすねのアーマーと全身にフィットしている服だけだ。

相手が動き始める前に一人目に肉薄し、クローで頭を斬る。

そのとなりの二人目は肘のブレードを突き刺す。三人目は膝蹴りを食らわせ、四人目と五人目は両手を広げてクローで同時に斬りつけ

る。

六人目を七人目の方向へ蹴り飛ばし重なったところをかかと落としで決める。

流れを乱さず、4秒程度で始末を終える。

教室を見回すと、慌てて逃げる根元の姿が見えたが雄二達と合流する事を優先し、教室を後にする。

実際1分位しかCクラスにいなかったのも、すぐに追いつく。明久と島田さんがみえないが、教室外に配置された追撃部隊を引きつけているらしい。

作戦は把握しているし、行平とメープルが待っているので一足先に帰るとしよう。

第七問

第七問

この戦争の勝者に戦争を仕掛けるであろうCクラス対策に秀吉を要とした作戦を行う。

僕がつつこんでもCクラス相手だと殲滅に20分位かかるから、無駄な戦争はやらないに越したことはないだろう。

今回の作戦は秀吉に女子の制服を着せて双子の姉であるAクラスの木下優子の演技をして挑発してもらい、Cクラスの敵意をAクラスに向けようというものだ。

僕が行平の真似をするという意見は始めからない。顔は結構似ているが、身長が僕の方が明らかに低い。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

同性の着替えなのにガン見している明久の考えがよくわからない。

「……………（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムツツリーニは指が擦り切れるんじゃないかってほどの速さで連写していた。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

僕にもなぜクラスの皆が複雑な表情をしているのかわからない。

「まあ、とりあえずCクラスに行こうよ」

「ああ、そうだな」

「うむ」

秀吉を連れて教室を出て行く。

「あ、僕も行くよ」

その後を明久が慌てて追いかけてくる。

FクラスからCクラスまでは結構離れているので、しばらく歩く。

「それじゃあ秀吉、ここからは一人でお願い」

Aクラスの使者になりすますので、僕達は同行できない。

よって、離れた場所から様子を窺う。

「気が進まんのう……」

「そこを何とか頼む」

「むう……。仕方ないのう……。…」

「とにかくCクラスを挑発してAクラスに敵意を抱くように仕向けて。頼んだよ、演劇部のホープ」

「あまり期待はせんでくれ」

ガラガラガラと秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

……。…。…。…。。

「流石だな、秀吉」

「意外とノリノリだね」

「うん。これ以上はない挑発だね……。…」

この時点でCクラスの敵意はもうAクラスに向いていることだろう。

『な、何よアンタ!』

この声は昨日会ったCクラス代表の小山さんのものだろう。

当然だが、いきなり豚呼ばわりされて怒気を含んでいる。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

自分から来くせに豚臭いというツツコミどころ満載のセリフだが、Cクラスからツツコミの声はあがらない。

まさかCクラスはツツコミが不足しているのか？

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！』

知名度としては秀吉よりAクラスの優子のほうが高い。

そもそも女装しているので簡単には見分けがつかない。その上挑発して冷静に判断ができないようにしている。

かなり良い作戦と言える。

………木下さんの風評以外は。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですっ
！？』

いや、誰もFクラスとは言っていないうえに、豚小屋の方がFクラスより衛生的だと思う。

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が

薄汚 いブタの貴女達を始末してあげるから!』

そう言い残し、靴音を立てて教室から出てきた。

「これで良かったかのう？」

どこかスッキリした顔で秀吉が近寄ってくる。

「それはもう素晴らしい仕事ぶりだったよ」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めよう!』

「作戦もうまくいったし、僕達も今日の戦争の準備をしよう。あと10分で始まるよ」

第八問

第八問

Bクラス戦が始まってからしばらくすると、戦線にいるはずの明久が駆け込んで来た。

「雄二っ！」

「うん？どうした明久」

「脱走だったらチョキでシバくよ」

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

どうやら今は冗談に付き合っている暇はないらしい。

それを察して真面目な顔で向き合う。

「根元君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

明久は真面目な顔で男子の制服を欲しがる変態だったのか……。

「ま、趣味は人それぞれだからね」

「そうだな、勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」

「で、話はそれだけ？」

本当にこれだけだったら半殺しにしても文句は言われないだろう。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は？」

「理由は言えない」

どうやらこっちが本題ってことかな。

「どうしても外さないダメなの？」

「うん。どうしても」

雄二が顎に手を当てて考え込む。

貴重な戦力である姫路さんを戦闘から外すなんて自殺行為といってもいい。

「頼む、雄二！」

明久は深く頭を下げてくる。

ノーリターンでハイリスク。はっきり言って無謀だ。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路がやるはずだった根元に攻撃をしかける役目をお前がやれ。」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

おっと、そろそろ僕も行動開始の時間ようだ。

「明久。お前にはお前の強みがある。それをうまく使ってみな」

一言残し、教室を出て行く。

第九問

第九問

『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

遠くから根元の声が聞こえてくる。

『どうした？軟弱なBクラスの代表サマはそろそろギブアップか？』

姫路さんを戦闘に参加させていないので、雄二率いる本隊も出動せざるを得なくなったのだろう。

『はア？ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前ら相手じゃ役不足だからな。負け組代表さんよお』

『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

『……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっている

のか？」

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言つてろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！一旦さがるぞ！』

さてと、そろそろ出番かな。

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか？』

退却を始める雄二達と入れ替わるように廊下の窓から校舎に入る。

「Fクラス、七伏博人がここにいるBクラス全員に化学勝負を申し込めます。試獣召還！」

『Fクラス 七伏博人
化学 672点』

「速攻で殲滅だ！」

フィールドを駆け抜けながら殲滅をする。

こんなヤツらじゃ弱すぎて話にならない！

「だああーっしやあーっ！」

明久がDクラス側の壁をぶち破って入ってくる。

物理干渉能力をもつ、観察処分者ならではの作戦だ。

しかし、彼らはBクラスの近衛兵に囲まれてしまう。

ちょうどこちらはBクラスの殲滅戦が粗方終わった。

ちょうどそこに保体教師を連れてムツツリーニが窓からやってくる。

「……Fクラス、土屋康太」

「待った！ムツツリーニ！こいつは僕が片づける！先生、根元恭二に勝負を申し込みます」

明久達が近衛兵を引きつけたので、丸裸になった根元。これで詰みだ。

『Bクラス 根元恭二

化学 198点

Fクラス 七伏博人

化学 632点』

「少しは面白い戦いができると思ったんだけど、残念だ」

先ほど召喚した召喚獣をそのまま引き連れてクローで一閃。

これでBクラス戦は終結した。

第十問

第十問

「ずいぶん思い切った行動にでたね。明久」

終戦後、拳をおさえている明久に、声をかけておく。

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

100%全てがフィードバックしないとはいえ、素手で鉄筋コンクリートを壊したのだからその痛さは並みじゃない。

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことは考えず、自分の立場を追い詰める男気溢れる作戦だったね」

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

何を行っているんだ明久は？

「その通りだけど」

「ウキィー！」

いきなり襲いかかってくるので、鳩尾に拳を叩き込んで黙らせる。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がバンバンと明久の肩をたたく。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根元。さっきまでの強気が嘘のようだ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素手な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲が騒ぎ始める。

カン！カン！カン！

「静粛に！静粛に！前にも言ったけど僕達の目標はAクラス。ゴールはここじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

その言葉でクラスの皆が納得したような顔になった。

Dクラス戦でも同じことを言っただろうから、雄二の性格を皆理解し始めたんだろう。

「……条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝ってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

「凄い言いようだが、誰もフォローしない。それだけのことをやっているからだ。」

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

おそらくこれがAクラス戦との取引材料になるのだろう。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるただけ伝えるんだ」

「……………それだけでいいのか？」

それだけな訳がないだろうが。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは秀吉の時と同じ、女子用の制服。

これは明久の要望を叶えるためと、雄二の個人的感情だろう。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを……」

根元が慌てふためく。そりゃあ嫌だよね。

ま、嫌がっても関係ないし。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守られるなら、やらない手はないな！』

何よりBクラスからの声援もある。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一瞬で根元を見限って腹部に拳を打ち込むBクラスの男子。

いい仕事するね。

「では、着付けに移るとするか。明久、まかせたぞ」

「了解っ」

明久はぐったりと倒れている根元に近づき制服を脱がせる。

ここからは見えていて毒なので身を翻して帰宅を決意した。

第十問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十一問

第十一問

Bクラス戦が終わり、2日たった。

残すはAクラス戦のみとなり、もうすぐ別れる予定のFクラスの教室で最後の作戦の説明をしている。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ」

まあ、Fクラスなのにここまでこれたのはたいしたことだと、僕も思う。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいもんじゃないという現実を突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

勉強だけじゃないからって疎かにしていいわけじゃないけどね。

「今日のAクラス戦だけど、一騎打ちで決着をつけたいと思う」

雄二の隣で説明すると、教室中にざわめきが広がった。

『どうということだ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバンと机を叩いて静まらせる。その衝撃で壊れないか心配だ。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

実際誰が考えても不可能だと思うが、それをあえて作戦とするのだから裏があるのだろう。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ!?!」

裏を読めない馬鹿は雄二からの洗礼としてカッターが頬を掠めた。

「次は耳だ」

「顔面じゃなくて良かったね、明久」

耳なら当たっても生きていけるだろう。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

「だけど、それはDクラスとBクラスの時も同じ。まともにやりあったら勝てなかった」

だけど僕達は勝ち進んできている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

最初は皆勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いた雄二の言葉だ。それを否定する人間はこのクラスにはいないだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!!』

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

霧島さんが日本史が不得手としているとも、雄二が得意としているとも聞いたことはない。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生レベルで上限あり。この内容だと満点が前提になり、ミスをした方が負けるといった注意力が勝負の鍵となる。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「??? それなら、霧島さんの集中力を乱す方法でも知っているとか？」

「いや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

先生の監視がある中での妨害程度で主席がミスするとは思えない。

「雄二、あまりもったいぶらないでそろそろタネ明かししてたほうがいい」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

「雄二がこのやり方を採ったのは、ある問題が出れば、霧島さんは確実に間違えるから、だよな？」

「ああ、ある問題――『大化の改新』が出ればアイツは必ず間違える」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

小学生レベルで出てこないって自分で言っているんだから、ほかの問題だよ。勝手に結論を出すのは愚かしいぞ。

「もっと単純に、何年に起きた、とかじゃないかな？」

「ビンゴだ博人。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

こんな基礎的な問題を学年主席が間違える……雄二がそのことを知ってるってことは、何か繋がりがあるはず。

「大化の改新が起きたのは、645年」

「こんな簡単な問題、明久ぐらいじゃないと間違えない」

「だが、翔子は間違える。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

さっきから少し気になっていたけど――

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

さっきから霧島さんのことを、アイツとか翔子とか呼んでいた。

ここで解答を間違えると明久達に襲われるだろう。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「待て、そんなこと言うなら博人はAクラスの佐藤楓と毎日一緒に登下校しているぞ」

「うん。メープルとは幼なじみだからね」

「聞いたか！？今愛称で呼んでいたぞ！狙うならコイツが先だろ！」

愛称って言うほどじゃないと思うけどなあ。

佐藤楓↓さとうかえで↓サトウカエデ↓メープルってだけだしね。

現在ほとんどの男連中が僕に向かって上履きを構えている。

「なに？やるつもり？」

カッターを投擲姿勢で構えて笑顔で問いかける。

このクラスをまとめるには武力が適していると思う。

『……………』

よし、鎮圧成功。

何故か明久が島田さんと姫路さんに戦闘態勢を取られているがこの際無視していいだろう。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

幼なじみだから弱点を知っていたということか。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

でも今回はそれが仇となるってわけだ。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

『システムデスクだ！』

第十二問

第十二問

「一騎打ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二と、僕、明久、姫路さん、秀吉、ムッツリーニと首脳陣が勢ぞろいだ。

しかしこれでは明久がボロボロにならない。少々残念だ。

「うーん、何が狙いの?」

雄二と交渉のテーブルについてるのは秀吉の姉、木下優子だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが訝しむのも当然だろう。下位クラスの僕達が一騎打ちで学年トップに挑むのはあまりに不自然だからだ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたい

けどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返答。ここからが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……。昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い戦線布告はまださ
れていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期
間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」

試召戦争の決まりである、準備期間。

泥沼化を防ぐために、敗北したクラスは3ヶ月間試召戦争を申し込
む権利を失うというものだ。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平
交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もな
い……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

これは今まで設備を入れ替えなかったからこそできる方法だ。

「…………それって脅迫？」

「もちろん！」

自信満々で答えてやれば、相手は何も言えないだろう。

「…………何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

代表同士の対決だったら雄二に勝ち目があるとは思えないだろう。

「え？ 本当？」

あまりにあっさり決まったからか、明久が驚いて声をあげた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

微妙なところで根元が役に立ったな。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……………」

やはり警戒されているようだ。

「なるほど。こっちから姫路か博人が出てくる可能性を警戒してい

るんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし、七伏君相手だとどうなるかわからないからね」

優子が僕のことを呼び捨てなのは、メールと優子がよく一緒にいるので必然的に交友があるからだ。

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を吞んでも良い」

一騎打ち五回か……。結構いけそうだね。

「ホント？嬉しいな♪」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハズデ はあってもいいはずだ」

「え？うーん……」

さすがに戦争の勝ち負けが係わって くる内容なだけに悩んでいるようだ。

「……受けてもいい」

「うわっ!」

明久は、静かに現れた霧島さんに驚いたようだ。別に驚くほどのことでもないだろうに。

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ?代表。いいの?」

「……その代わり、条件がある」

「条件だと?」

「……うん」

霧島さんは雄二を見た後、姫路さんをみて再び雄二を見た。

「……負けた方は何でも一つ 言うことを聞く」

後ろで馬鹿二人が何かやっていたが、雄二も気にしていないようなので無視することにした。

「じゃ、こうしよう?勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて?」

全部とはいかなかったが、妥協案が得られた。

「そのぐらいなら問題ないよね?」

「ああ。交渉成立だ」

「ゆ、雄二、博人！何を勝手に！まだ 姫路さんは了承していないじゃない か！」

は？なんでそこで姫路さんが出てくるの？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

姫路さんに迷惑はかけないってことは誰かが犠牲になるのか？

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

「交渉は成立したし、一旦教室に戻ろう」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

第十三問

第十三問

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はAクラスの担任で学年主任である高橋先生が立会人を務める。
暇なのか秋音姉も教室内で観戦している。

「ああ」

「……………問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。オンボロ教室じゃあ狭すぎるからね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは秀吉の姉の木下優子さん。

対するこちらは、

「ワシがやろう」

その弟である秀吉だ。

姉弟だからこそ、弱点や集中力の乱し方を知っているはず。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ、姉上？」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

小山――Cクラスの代表で秀吉が優子の演技をして豚呼ばわりした人物。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

おそらく抹殺するつもりだと思います。

「姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしたことになるのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ！ ちがつ……！ その関節はそっちには曲がらな……！」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

「秀吉は急用できたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「それじゃあ、僕がいこうかな」

ハンカチで返り血を拭う優子の前にでる。

「急にこっちが代わっちゃったから、お詫びとして三対一でやらせて」

「自分がいくっす」

「では私も」

名乗り出てくるのはメープルと行平。

「ちょ、ちょっと！いくら相手が強敵だからって三対一は……」

「本気でこないと、負けるよ？それでは物理でお願いします」

「それでは召喚をしてください」

「」「試獣召還」「」

魔法陣が現れ、四体の召喚獣が出現する。

一体目、おなじみの僕の召喚獣。

二体目、西洋風の鎧にランスを持った優子の召喚獣。

三体目、左手に盾、右手に刀を持ち、和服姿のメーブルの召喚獣。

四体目、スーツとシルクハットを装備し、手には銃のようなシルエットで、弓のようなパーツのついた――

「繚乱の対弩!?!」

銀と金のフレームを持ったボウガン。なんであんなものを持っているんだ。

『Aクラス 木下優子

物理 321点

Aクラス 佐藤楓

物理 398点

Aクラス 七伏行平

物理 399点

Fクラス 七伏博人

物理 798点』

「あれ?メーブルも行平も振り分け試験は調子悪かったの?」

今表示されてるのはAクラスの人振り分け試験の点数のままのはずだ。

いつもは450点ぐらいのはずなんだけど。

「ハクのことが心配だったっす」

確かにあの日は遅刻しちゃったからなあ……。

「ありがと。それじゃあ、始めよう」

400点っていないというのありがたい。400点オーバーでなければ腕輪の使用はできないからね。

三対一は分が悪いので、やっぱり作戦は――

「始め！」

先手必勝だ。

一瞬で優子の前まで移動し、クローをクロスさせて全力で攻撃する。

完全な不意打ちなので、ランスの腹でかろうじて防がれたが勢いよく吹っ飛ぶ。

行平とメーブルの方を見ると行平は弾の装填を終え、メーブルは盾を構えていた。

『Aクラス 木下優子
物理 102点』

ふむ、一撃では倒せなかったか。

今度は盾を構えているメーブルの前行き、回り込もうとするが、行平により妨害される。

若干ぎこちない動きから、召喚獣に慣れていないことがわかる。

しかし樂觀してはいられない。おそらく一分もしたら二人とも慣れてしまうだろう。

必然的に短期決戦に持ち込むしかない。

少し離れている行平に距離をつめ、クローで斬りつける。

すんでのところでかわされ、結果は肩を切り裂くだけとなった。

『Aクラス 七伏行平

物理 273点』

もう一撃加えようとするが、後ろからメーブルが切りかかってくる。

それをブレードで受け流し、メーブルが武器を持っている右手をつかみ、行平との対角線上に動かす。

行平が放った銃弾がメーブルに迫るが、盾で弾かれたので、蹴り飛ばして距離をとる。

復活した優子がランスで突進してくるが、横にステップして回避。

行平により銃弾が放たれたので、優子に追撃するのを諦めて弾をはじく。

僕は今のところノーダメージで戦っている。操作の危うい相手に対して、素早い動きの僕は戦いにくいのだろう。

僕の武器は素早さ。防具がほとんど無いかわりに、高速戦闘が可能だ。

速さに乗れば力が弱くとも重く、攻撃に当たらなければ防御は必要ない。それが僕の戦い方。

優子とメーブルが同時に攻撃を仕掛けてくる。

ランスは近い間合いだと突くことができない。

よって、優子を最初に仕留めることにした。

メーブルの剣を左手で弾きながら、突いてきたランスを紙一重でかわし、その腹を踏み、地面に押さえつけてランスの動きを封じる。

無防備なその体に、ブレードを一閃。撃破する。

しかし、疎かになっていたメーブルの盾による打撃と、行平の狙撃を受けてしまった。

『Aクラス 佐藤楓

物理 314点

Aクラス 七伏行平

物理 273点

Fクラス 七伏博人
物理 403点』

一旦距離をとり、再び攻撃する。

しかし、メープルは刀で防御し、クローの刃と刃の間に刀を入れてきた。

速さを充実した戦い。しかしヒットアンドアウェイではなく、勢いを殺さず流れて攻撃する。無駄を省き、攻撃を繋げているので、動きを攻撃を受け止められると動きが止まってしまう。

今がまさにそれだ。

動きを止めた僕に、行平は容赦なく狙撃してくる。

すぐに回避にうつるが、2、3発当たる。

『Fクラス 七伏博人
物理 301点』

だいぶ慣れてきた二人は始めに比べだいぶ厄介だ。

まずはサポート重視の行平を倒すことを目標にする。

牽制で放たれる銃弾をかわし、肉薄する。

右手の攻撃は銃身で防がれるが、左手の攻撃は当たる。

しかし一人に集中することは、もう一人を疎かにすること。

メーブルの刃が今にも当たるというところで、腕輪の能力を発動する。

「来い、ジャコウアゲハ」

メーブルの剣は、突然現れた蝶『ジャコウアゲハ』に防がれた。

攻撃を防がれ、無防備なところにフェイントをいれ、後ろに回り込んで蹴り飛ばす。

盾で防御姿勢をとっていたメーブルは、なすすべもなく後ろをとられ、飛ばされる。

武器として昆虫を呼ぶ『昆虫召喚』。それが僕の腕輪の能力。ちなみに攻撃を受けても昆虫は死なない。

『Aクラス 佐藤楓

物理 163点

Aクラス 七伏行平

物理 42点』

起き上がったメーブルが、再び攻撃してくるが、ジャコウアゲハで防ぐ。

その間に行平にトドメをさすため肉薄する。

だがその瞬間行平は銃身を持ち、ボウガンを振り回してきた。

それを左手で受け流し、懷に潜り込む。クローを突き刺すことに成功するが、最後にカウンターとして蹴りを入れられた。

『Fクラス 七伏博人

物理 231点』

蹴りによって少し宙に浮いたところにジャコウアゲハを振り払ったメープルが上から刀を振り下ろしてくる。

かろうじて防御に成功するが、無理な体勢な上にそのまま地面に叩きつけられてしまう。

「来い、キイロスズメバチ」

もう一度腕輪をつかい、キイロスズメバチで追撃を防ぐ。

『Fクラス 七伏博人

物理 146点』

体制を立て直し、キイロスズメバチと共に攻撃をする。

メープルは盾で攻撃を防ぎ続けるが、腕をキイロスズメバチに噛まれ動きが阻害される。

止まったところに勢いをつけ、全力で攻撃を叩きつける。

『Aクラス 佐藤楓

物理 0点』

これでFクラスの一勝目が決まった。

第十四問

第十四問

Aクラスの中でもトップクラスに対して三対一での勝利。

このことでFクラスの志気は最高潮に達していた。

「流石だな、博人」

「お褒めにあずがり光栄です、代表」

待機場所で迎えてくれた雄二とハイタッチする。

「よくやった♪さっすが博君!」

観戦していた秋音姉が頭をなでてくる。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さん。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?! 僕!?!」

Fクラスからは明久が出るようだ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄二の言葉。

やっぱり明久が負けることを信じているんだろうな。

というかいまだに頭を撫でられているのは何故だろう。

「そろそろやめて?」

秋音姉は中学生と言われても納得できる容姿と身長だ。それに頭を撫でられているというのはどうも良くない。

「この撫で心地はやめられない、止まらない」

むう、撫でられると少し気持ちいいから困る。

「あれ、気づいた? ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

おや、明久がまだくだらない戯言を言っているようだ。

処刑準備しておくか……。

「それじゃ、あなたは……!」

なんでこんな嘘を信じるんだろう？

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――」

大きく息を吸ってこの場にいる皆に告げてきた。

「――左利きなんだ」

『Aクラス 佐藤美穂

物理 389点

VS

Fクラス 吉井明久

物理 62点』

一瞬で勝負が終わった。

「人がせっかく上げた志気をどうしてくれるのかな？」

「か、関節が！ 関節がああああ！」

ついでに頸動脈を絞めて意識を刈り取っておく。

「よし。勝負はここからだ」

「そうだね。これからが本番だよ」

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムツツリーニが立ち上がる。

科目選択権のある今回は圧倒的にこちらが有利だ。

「じゃ、僕が行こうかな」

対してAクラスからは工藤愛子さん。ショートカットの髪の毛のボーイッシュな女子だ。

「一年の終わりに転校してきた工藤 愛子です。よろしくね」

「科目はなににしますか？」

「……………保健体育」

ムツツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

転校生って言っていたから、ムツツリーニの力を理解していないのだろうか？」

「でもボクだってかなり得意なんだよ？……………キミとは違って、実技で、ね？」

実技？それってやっぱり怪我の治療とか？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ————」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ!」

「そうです! 永遠に必要ありません!」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが」

明久はいつの間に復活したんだろう。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣召喚っ」と

「……………試獣召喚」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を持って現れる。ムツツリーニは小太刀の二刀流。そして工藤さんは、

「なんだあの巨大な斧は!?!」

見るからに破壊力満点の巨大な斧。おまけに腕輪を装備している。

『Aクラス 工藤愛子』

保健体育 446点

VS

Fクラス 土屋康太
保健体育 572点』

しかし点数ではムツツリーニのが上、腕輪も両方が付けているので、点数で劣っている工藤さんの方が不利だろう。

「こ、こうなったら……（ピラッ）」

「……………！（ブシャアアアア）」

何だ！？何が起こったんだ？いきなりムツツリーニから鼻血が間欠泉のように吹き出したよ！？

ムツツリーニが鼻血で倒れている間に、工藤さんはムツツリーニの召喚獣を倒した。

……………この勝負は一体何だったのだろうか。

第十五問

第十五問

「これで二体一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらから出るのは、当然姫路さんだ。

今、Aクラスと真っ向から戦えるのは彼女のみだ。

「それなら僕が相手しよう」

Aクラスから出てきたのは学年次席の久保利光君。

「やはり来たか、学年次席」

姫路さんに次ぐ学年トップクラスの實力の持ち主である。

明久のことが好きな同性愛者という話も聞くが、気にしないでおう。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二が心配するのは、姫路さんと久保君の実力がほぼ互角だからだ。

互角の戦いでは、負ける可能性も大ということだ。

「科目はどうしますか？」

雄二が科目選択をするので、今回こちらは科目選択をできない。

「総合科目でお願いします」

総合科目。科目を選べるなら、自分の得意なものを選ぶのは定石だが、久保君はここで実力をハッキリさせたいと思っているのだろうか。

「それでは……」

「「試獣召喚っ！」」

『Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点』

決着は一瞬でついた。

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

至る所から声があがる。

点数差が400点オーバーなのだから無理も無い。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

まあ、人の（不幸）の為に行動するのはよく見かけるね。

「これで二対二です」

高橋先生にも若干変化が見られた。FクラスがAクラスと渡り合っていることに戸惑っているのだろうか?

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは代表の霧島翔子さん。

対するこちらからは当然、

「俺の出番だな」

Fクラス代表、坂本雄二だ。ここまでは作戦通り。

「教科はどうしますか？」

霧島さんが負けるわけないと思っているのか、Aクラスの皆は特に騒いでいない。

深く考えれば危機的状況だと思うけど。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが広がる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル、万点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じて、高橋女史は教室を出ていく。

その背中を見送り、雄二に近づく。

「最終決戦。頑張って」

「ああ、勝ってみせるさ。」

手を挙げて思いっきりハイタッチする。

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された」

明久が差し出した手を、雄二はグッと握る。

次にムツツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

口の端を軽く上げ、ゆっくりと戻っていく。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ！」

高橋先生が戻って来て、雄二と霧島さんに声をかける。

そして、決戦の会場へと向かった。

僕はモニターで視聴覚室の様子を見る。

『では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

画面の向こうで日本史担当の先生が問題用紙を二人の机においた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、初めてください』

二人により、問題用紙が表にされる。

そして、ディスプレイに問題が表示される。

平城京、平安京、鎌倉幕府……大化の改新

「あ……!」

「よ、吉井君っ

「うん」

「これで、私たちっ……!!」

「うん！これで、僕らの卓袱台が」

『システムデスクに!!』

Fクラス皆が声を揃える。

「最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ!!」

『うおおおおおおお!!!!』

Fクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた。

しかし、ついさっき重要なことに気づいてしまった。僕は苦笑いしかできない。

（あれだけ自信满满だったから忘れてたけど、雄二が百点取れなかったら意味ないよね？）

「あれ？どうしたの博人？せっかくの勝利なんだから、もっと喜ぼうよ」

少し変な僕の様子に気づいたのか、明久が声をかけてくる。

「水を差すようで悪いけどさ、雄二はこのテスト百点とれるんかね？」

「ははっ、まさかそんな……」

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄二 53点』

Fクラスの卓袱台が、みかん箱になった。

第十五問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十六問

第十六問

「三対二で、Aクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだFクラスの面々に対する高橋先生の締め
言葉。

まさかこんなことが予想通りになってしまうとは……

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食い縛れ！」

雄二に制裁を加えようとしている明久にあるものを渡す。

「はい、ナイフ」

別に殺傷用ではなく、いざという時の十徳ナイフだ。

「吉井君、落ちついてください！」

ナイフを受け取ろうとした明久に姫路さんが後ろから抱きついた。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら、30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「もしくは『否定できない』、だね」

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！と何故止めるんだ姫路さんに美波！ この馬鹿には喉笛を斬り裂くと言う体罰が必要なのに！！」

「それって体罰じゃなく処刑です！」

「明久、ナイフは使い終わったら返してね。明久も負けたんだから同罪だし」

「ドンマイ雄二！気にするな！」

切り替え速いな。

「…………でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断して
いなければ負けていた」

「言い訳はしねえ」

つまり凶星だと。

「…………ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

霧島さんの言葉で、突然ムツリニと明久が撮影準備を始めた。

そういえば僕もメーブルと約束してたな。どんな要求なのだろう。

「…………それじゃー」

霧島さんは小さく息を吸って、

「…………雄二、私と付き合って」

言い放った。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにー」

ぐいっ　つかつかつか

霧島さんは雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った。

「……………」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙が教室に訪れた。

今の出来事に言葉が出ないようだ。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

それを破ったのは、とある教師の声。

「あれ？　西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな」

『我が』Fクラス、ということは――

「西村先生。もしかして担任が福原先生（現担任）から西村先生に変わるんですか？」

「そのとおりだ。良かったな、お前ら。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なに！？』

クラスの男子生徒から悲鳴があがる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、ないがしろにしているものじゃない」

負けた僕達には言い返す言葉もない。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！　なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には、悔い改めるといふ発想はないのか」

明久はああ言っているが、実際は次の試召戦争に向けて勉強する気だろう。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

放課後こそ学園生活を最も満喫できる時間なのに……。

それに、もし休日まで補習を入れられたら、昆虫採集の時間が減るじゃないか！

こうして、僕らの最初の試召戦争は憂鬱を残して終わった。

第十七問

第十七問

戦争が終わった日の、七伏家。

リビングに、僕、行平、メープルが集まっていた。

「いや、楽しかったね試召戦争」

「うん。いろいろあったけど、本当に楽しかったよ」

「そうですね。本気で戦うというのは気分の良いものです」

あ、そういえば――

「メープル、あの約束は？」

「私の言うことを聞いてくれるんだよね？」

「賭は僕の負けだからね」

「それじゃあ、今から私が言うことに、逃げないで、正直に伝えてそれがお願い」

それぐらいならおやすいご用だと、首を縦にふる。

「あのね………私はハクのが、小さい頃から好きだったの。だから、付き合っ^てほしいのだけど」

………え？

好き？あの可愛くて綺麗で明るくて優しくて勉強もできる通称メープルこと佐藤楓が僕のことを？

……ハッ！少しトンでしまった。

これに逃げずに正直に応える。それが僕のとる行動。

少し息を吸って、答える。

「僕も、小さい頃から、メーブルのことが好きだったーーと思う」

「『思う』？」

「自分のことは良くわからないからね。けど、僕はメーブルのことが好きだといえる」

「そう。それじゃ、その思いを確信にしてあげる」

そういつて、僕の前に来て唇を合わせてきた。

「それじゃあ、また明日。ユキ、それと私の恋人さん♪」

メープルはそういい残して、去っていった。

ちなみにユキとは行平のことだ。

その後5分間僕は顔を真っ赤にしたまま、唇に手を当てたまま動けなかった。

ちなみにその日は危なかしくて任せられないということで台所から追い出された。

設定？

設定？

『七伏博人』（ななふしはくと）

身長161cm 幼い顔立ちなので、小さい印象を受ける
得意科目…理数系、特に生物が飛び抜けている。

趣味…昆虫採集、科学系の本の読書

特技…運動全般（人並み以上）、記憶、ポーカー

好きな物（事）…昆虫、甘いもの、疑う事、科学、難しい事
嫌いな物（事）…苦い物、信じる事

召喚獣…クロー、足の鉤爪、肘のブレードが武器。

防具は脛のアーマーのみ。

腕輪は『昆虫召喚』で、武器として昆虫を召喚

し、自由に操る。

その他…周りを気にせず我が道を行く。『信じるよりも疑う方が確実に真実にたどり着ける』という。『昆虫少年』や『速攻』の二つ名がある。折りたたみ式の捕虫網を常時装備。

『佐藤楓』（さとうかえで）通称メープル

身長…159cm

得意科目…国語、英語

趣味…読書、折り紙

特技…速読、細かい作業

好きな物（事）…文学、よく考える事、博人
嫌いな物（事）…付和雷同

召喚獣…着物（防御力高）、盾、刀
その他…瑞希ほどではないが、スタイルが良く、人気がある。『くっす』という口調はキャラ作り。結構な策士。博人を逃げられなくするように、日々策を練っている。

『七伏行平』（ななふしゆきひら）

身長…178cm 博人とは反対で大人びた印象を受ける。

得意科目…社会系

趣味…散歩、旅行

特技…投擲、弱点探し

好きな物（事）…歴史や文化、面白い物

嫌いな物（事）…平穩すぎることに

召喚獣…スーツとシルクハットを装備し、ライトボウガンが武器。

その他…博人の双子の兄。丁寧な口調に反して、弄るのが好きなSの人。面倒見がよく、好かれやすい。

『杉本秋音』（すぎもとあきね）

身長141cm 中学生のような容姿

趣味…物体の運動観察

特技…球技、暗算

好きな物（事）…科学、のんびりする事

嫌いな物（事）…面倒事

召喚獣…白衣にツインチェインソー

その他…二年Fクラスの副担任。小さい身長に対してスタイルは良い。のほほんとした雰囲気。

く僕とメーブルと殲滅戦く（前書き）

今回は短編です。

く僕とメーブルと殲滅戦く

短編く僕とメーブルと殲滅戦く

明久がラブレターを貰うという騒動の翌日、僕はいつも通り三人で登校していた。

「ところで、お二人はどうですか？どこまで行きました？」

「ぶっ……………なんてことを聞くんだけ」

「まだキスだけという残念な感じ」

「おや、残念。良い感じでいじれるかと思ったのですが」

そんなとき、僕達の話聞ける距離に誰かの足音が聞こえた。

「あれ、雄二。おはよう」

その人物は、Fクラス代表坂本雄二だった。

「雄二君じゃないっすか。おはようっす」

メーブルは他の人が来たので、『くっす』という口調になっていた。

その後雄二も交えて雑談しながら学校へと向かった。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

毎朝の恒例行事の出席確認。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

いつも騒がしい教室にのどかなひとときが訪れている。

今日は平穏に過ごせー

「坂本」「……………博人が佐藤楓と付き合い始めたようだ」

『殺せええっ!!』

そうもなかった。

「やっぱり聞いていたんだね、雄二」

あのときもつと速く雄二の気配に気づくべきだった。

『以前からイチャイチャしてやがったが、付き合い始めるなんて』

『これはもう殺すしかないな』

『弁明の余地はないな』

「手塚」「七伏クロス」「藤堂」「七伏クロス」

「返事は『はい』だ！」

西村先生が殺意をこめた返事をした奴らを注意する。

「ちょっと待って先生！昨日はそんなこと言わなかったよね！」

昨日明久はまったく同じ展開になったが、そこは生活態度の差だろう。

出席確認が終わり、西村先生が出席簿を閉じる。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

教室を出て行く西村先生に、後ろからついていく。

西村先生のいる状態では手が出せないのか、Fクラスの連中も攻撃してこなかった。

そのまま職員室前まで行き、次の授業の先生と一緒に教室に入った。

そんなことを繰り返してなんとか昼休みまで逃げ切った。

時間はたっぷりあるので、殲滅を開始する。

「見つけたぞ！誰か応援にぶっへっ！」

早速一人目が来てくれたので、注意がそれた隙に足を払い転ばせる。

手足を縛ってから西村先生に連絡し、補習室に送る。

「いたぞ！ B部隊に連絡して挟み撃ちにするぞ！」

昨日と同じく部隊編成までしている。

少し厄介なので、ダッシュして逃げる。

僕を追うためにバラバラになった奴らを一人ずつ縄で縛り、補習室に送ってやる。

これで雑魚は殲滅完了。

そんな時、いやな気配を感じて横に動くとしさっきまで立っていた場所にペンが刺さっていた。

「……………裏切り者には、死を」

文房具を手にも構えてこちらを狙っているのは、ムツツリーニ。動きが素早いので、敵の中では一番厄介だ。

「いくよ、ムツツリーニ」

「……………次はカッターを投げる」

脅迫は気にせずつつこんでいくと、宣言通りカッターを投げってくるが、刃が出ていないので手で弾く。ムツツリーニが次の行動に移る前に足払いをして、転ばせてから縛りあげる。

昼食をゆっくり食べるため、早めに殲滅することにし、敵を探していると木刀を持った須川がいた。

「ここまでだ、七伏！」

「うっさい速くくたばれ」

腰から取り出した捕虫網の柄で須川の木刀を弾き飛ばし、やっぱり足払いで転ばせてから縛る。

「ぐふう！」

丁度良くバカが現れたので、何か言う前に潰した。

これで残るは後一人、坂本雄二だ。

これは一番簡単に始末できるので、わざと最後に回した。

携帯電話を取り出し、ある人物にかける。

「あ、もしもし。霧島さん？雄二が霧島さんと昼食を食べたいんだって。恥ずかしがり屋だから霧島さんから迎えに言ってあげて」

はい終了。

「ハク！大丈夫だったすか？」

「いやはや、面倒なことになりましたね」

丁度メープルたちと合流できたので、昼食を食べるために、Aクラスに向かう。

メーブルとの関係がばれたのは予想外だったけど、これはこれでいいんじゃないかな。

第十八問

第十八問

とある日の七伏家。

居候である杉本秋音が、僕、行平、メープルをリビングに集めた。

「皆さんには重大な話があります」

「一体何ですか？」

行平が聞くと、秋音姉が自信満々に答えた。

「いやあ、実は私ね、試験召喚システムの腕輪の開発を手伝ったの。そこで、清涼祭の『召喚大会』の賞品として学園長の作った『白金の腕輪』とは別に『黄金^{こがね}の腕輪』っていうのを作っただけど、欠陥があっただけ」

「それで、欠陥はどんなものなの？」

暴走が起きたりするのだろうか？

「500点以下の点数で使うと99, 5%の点数を失っちゃうんだよ♪」

「酷すぎる!」

たとえ400点とっても、使った瞬間2点になるとか不良品すぎだ。

「というわけで、君たちには私のミスをもみ消して欲しいのだ♪」

「今さらって大人の事情を言いましたね」

失敗の隠蔽とかなんてことを頼むんだこの人は。

「君たちなら、得意科目はよゆーで500点突破してるもんね」

「その依頼の私達メリットは？」

そうメーブルが聞くと、フッフッフと笑ってから、

「優勝者には『如月ハイランド』のペアチケット二枚が進呈されちゃいます!」

「絶対やってみせる」

メーブルは即答していた。

「え? どうしたのそんな急に?」

「博人、つまりこういうことです。メーブルは博人と如月ハイランドでデートがしたい、と」

「ほえ? そんな……」

「まったく、博人は恋愛話に弱すぎです。反応が面白すぎて弄りたくなってしまうがありません」

最近は恋愛話の話題になると赤面したり言葉がでなくなること、頻繁に行平にいじられている。

行平は丁寧な口調とは裏腹に、弄るのが好きなSなのだ。

「ちなみに、企業側が訪れたカップルを無理やり結婚させようとしてるって噂もあるよ」

「これはもう受けるしかないわ。この依頼」

結婚……かあ。

「さて、博人が処理落ちしかけていますが、召喚大会はペア出場ですよね？どう組み合わせるんですか？」

「私としては、近接型の博君と、遠距離型の行君のペアが良いと思うな」

「それじゃあ私は他の人を誘ってみる」

どうやら、方針は決定したようだ。

「んじゃ、これで解散！」

こうして召喚大会の出場が決定した。

……その後いろいろ面倒事を押しつけられたけど。

第十八問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十九問

第十九問

新学年になって最初の行事である『清涼祭』。

そして今は、その準備の為のLHRの時間。

どの教室も活気づいているのだが……。

『吉井！こいつ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！』

我がFクラスのほとんどの生徒は野球をしていた。

さっき西村先生が連れ戻しに行ったからじきに戻ってくるだろう。

ちなみに僕は秋音姉に任された清涼祭のパンフレットのレイアウトを考えている。

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

野球を中断して戻って来た雄二はだるそうにござの上に座っている僕達を見下ろしながら宣言した。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

ふむ、要約すると『俺はやる気ないから、誰かやっといてくんね？』ってことだね。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え？　ウチがやるの？　うゝん……、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんとか博人の方が適任なんじゃないの？」

「え？　私ですか？」

「姫路には無料だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタムアップになる」

少数派の意見を切り捨てられない姫路さんでは時間がかかりすぎる。雄二はその辺のことを雄考えて島田さんに任されたのだろう。

僕は杉本先生からの仕事が入っていて忙しいから無理。

その存在を示すためトントンとミカン箱（超補強）の上の紙を叩く。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「あ、ちなみに僕も」

「学校の宣伝みたいな行事なのに。三人とも物好きだなあ」

召喚大会は、ぶっちゃけると試験召喚システムのPR企画だ。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言ってきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけで バカにするんですよ？ 許せませんっ」

「……………」

Fクラスをよく知っているからこそ言える事がある。

このクラスはバカばかりだ。

「僕は賞品の腕輪目当てかな？」

「あー、4人とも、こっちの話を続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

チラッと雄二は明久の方を見た。

なるほど。明久を生け贄にするつもりか。

「んゝ…………。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど…………」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決戦投票したらいいだろう」

皆もいいな、とクラスメイトに告げると、ちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思う』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『いや、七伏のほうがいいだろう』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやってもらった方が』

一回変なの混じってたな。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

秀吉が明久に一票投じてくれる。

「秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな〜なんて」

ここでたたみかけて納得させてしまおう。

「それは他の皆も同意見だよ。それだったら適任の人にやってもらったほうが良いと思うよね？」

「むう……。それはそうだけど……」

島田さんのサポートなんだから、明久以外の適任がいるはずはなからう。

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね〜。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がったところで、島田さんはボロボロの黒

板に候補者の名前を書き連ねた。

『候補?……吉井』

予想通り明久だ。

『候補?……明久』

こっちも明久だ。

それにしても斬新な候補の挙げ方だ。

「さて、この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない?」

そこは気にしても無駄なんだよ、明久。

『どうする?どっちが良いと思う?』

『そうだなあ……。どちらもクズには変わらないんだが……』

「こらあっ!真面目に悩んでいるフリをするんじゃない!あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ!」

それを言ったら明久もクズになると思うんだけど。

まあ結局明久が副実行委員になり、壇上に上がった。

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふあゝ……」

入れ替わりに席に戻る雄二だが、欠伸をこらえる気もなくダルいオ
ーラを纏っていた。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん。了解」

第二十問

第二十問

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

島田さんが言うと、何人かが手を挙げた。

少し位やる気のある人はいるようだ。

「はい、土屋」

「……………（スクツ）」

名前を呼ばれてムツツリーニが立ちあがる。

「……………写真館」

「…………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

僕も同意見だ。裏で写真の売買が行われるのは必至だろう。

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる」

「あいよー」

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

黒板に書かれた候補には、謎な名前がつけられていた。

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶ー」と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

ウェイトレスっていつでも、このクラスに女子は二人。秀吉を合わせても三人だけだ。ウェディングドレスを主役に持ってくるのは厳しいだろう。

でも、ウェディングドレスか……………

…………ハッ！結構トリップしてたみたいだ。

慌てて黒板を見ると、候補？が書かれていた。

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

集客力の低そうな名前だな。いや？興味本位で来る客もいるか。

「さて、他に意見はーはい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら須川は立ち上がった。

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは――」

確かに中華料理は地域差が大きいつて話だから、奥の深いジャンルというのも頷ける。それにしても随分こだわりがあるんだな。

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん」

明久は返事したのは良いが、話を全く聞いていなかったので、何を書いたら良いのかわからないようだ。

「どうなの？早く書いてよ」

「りよ、了解」

【候補？中華喫茶『ヨーロッパアン』】

頭に残った言葉を適当に書いたようだ。

明久がちょうど書き終えた時に、西村先生と秋音姉が教室に入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです。

黒板に書いてあるのは――

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

当然の反応といえるが、流石に倍はきつい。

「あゝ、西村先生。『』の中は無視してください」

「それなら妥当なところだな」

ふう、回避成功だ。

「しかし、吉井にこんな大役を任せていいのか？稼ぎを出せば設備を向上させられるぞ？」

溜息混じりの鉄人の声を聞いて、クラスの皆の目が光った。

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に教室内が活気づく。ランクが下がる前の設備でさえ不満があったんだ。この設備に不満がないわけがない。

僕も最近はこの教室から避難するためにAクラスに入り浸っている。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

姫路さんが手を胸の前で握り、立ち上がっていた。

……どうやら色々問題があるようだ。

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命的じゃないか？』

『ウェディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

皆がやる気になったのは良いが、あまりにもまとまりが無さすぎる。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田さんが手を叩いて注意するが、あまり効果はなく、それぞれ好き勝手言っている。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

うーん。これだけまとまりのないクラスをまとめるのは難しいだろうなあ。

それにそろそろ五月蠅くなってきた。

「この中から一つだけ選んで手を挙げて！」

業を煮やした島田さんが決を採りにかかる。

結果は僅差で中華喫茶の勝利だった。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スクツ）」

と、須川とムツツリーニが立ち上がった。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理が紳士のたしなみなんてのは聞いたことがない。

おそらくチャイナドレスを見るため中華料理店に通っていたら見様見真似でできるようになったのだろう。

まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」

いつの間にか明久はホール班のトップにされたようだ。

「それじゃ、私はホール班にー」

「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

平然と厨房に入ろうとした姫路さんを明久が呼び止める。

自覚がないので質が悪い。

『良くやった、明久』

『明久、グッジョブじゃ』

『……………！（コクコク！）』

アイコンタクトで明久の功績を褒め称える。

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

本当のことをいうと、料理の腕を向上させるために毎日作ってきたなどというのだろう。死の危険をおさえるためにも、うまくごまかさなくちゃいけない。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あ”っ！み、美波！僕の背中にはサンドバックじゃないよ！」

「か、可愛いだなんて……。吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

「いや、効率的にもホールに専念して」

もってもらしい理由で排除しておく。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

明久、そこは気を使ったほうがいいぞ。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃあっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

本当に学習しないと死ぬぞ、明久。

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

Fクラスらしく、ドタバタした状態で設備のかかった重要な学園祭が幕を開けた。

第二十二問

第二十一問

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

『失礼しまーす！』

『……当に失礼……どもだね……返事を待つ……』

『やれやれ……だというのに……ですね……話を続け……差し金
ですか？』

『……言わないでくれ……このアタシが……手を使わなきゃ……
のさ。……ないというのに』

『……だか。学園長……隠し事が……ですから』

『……言っているように……なんて無いね……違いだよ』

『…………ですか。……否定される……そういうことに……ましょ
う』

『……では、この場……させていただきます』

教頭の竹原が踵を返して学園長室を出て行くのを確認する。

「ふう。疲れた」

「まったく、ねちっこい男は嫌なものね」

そう言って、学園長室の『本棚の下の書類を入れるスペース』から秋音姉と共に出てくる。

「……………」

「……………」

そして、学園長室にいた明久と雄二と目があつた。

「あれ？どうしたの二人とも」

「学園長に何か用事？」

「さっさと用件をいいな、ガキども」

平静を装いつつ話題を変える。学園長との連携も完璧だ。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

僕たちの連携に流され、用件を話し始める雄二。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

学園長が礼儀知らずなので、説得力はない。

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。それでこっちが――」

雄二が明久を指差し紹介する。

「――二年生を代表するバカです」

随分わかりやすい説明だね。

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言っていないませんよね！？」

明久といえばバカ。バカといえば明久なのは誰でも知っている。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

映画の悪役のように口の端を吊り上げて笑う学園長。少し妖怪っぽい。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

今のところ雄二は敬語を保っているけど、崩れるのは時間の問題だ

ろう。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

やっぱり予想通りだった。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれはともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調を崩さず、危険な言葉をちりばめていた。これでお願いに来ているというのだから驚きだ。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

そんな雄二の説明を受けて、学園長は思案顔をしていた。

何度か話に出てきた体調を崩す生徒ってのは姫路さんのことだろう。おそらく、このままの教室の設備じゃ転校することになるのだろうな。

「あの、学園長……?」

明久が雄二の発言に学園長が機嫌を損ねたのではないかと心配そう

に発言する。

「……ふむ、丁度いいタイミングさね……」

学園長は小声でそう呟いた。どうやら面倒事をやらせるつもりのようにうだ。

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

姫路さんの転校が関わっている以上、明久も真剣なようだ。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

雄二がそれを言うのは間違いだ。

と、そんなときに肩をトントンと叩かれる。

（どうしたの秋音姉？）

（もしかして学園長はあの二人に『白金の腕輪』を任せるつもりなの？）

（準優勝の可能性がある低得点者だからね）。丁度いいんじゃない？）

（学園長はひねくれてるから欠陥を正直に話さないだろうね）

白金の腕輪には欠陥がある。

それは、高得点者が使うと暴走するというものだ。

（そう言えばこの部屋の盗聴器は？）

（竹原が仕掛けたのは全部破壊しちゃったよん♪）

雄二たちは学園長と取引をしているが、それを妨害するであろう竹原に情報が伝わらないのは良いことだ。

（そろそろ取引が終わったみたいよ）

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「おうよっ！」」

教室の改修との交換条件を引き受け、話は決まったようだ。

「……………ところでなんで、博人はあんなところから出てきたの？」

明久がさっきからずっと思っていた疑問をやっと口にしたようだ。

『黄金の腕輪』の欠陥は言えないことなので、誤魔化す。

「変な噂のあるチケットを勝ち取ってくれていう学園長からのお願いを聞いたただだよ」

「それじゃ、僕達と同じだね」

明久は気づいてないだろうが腕輪が本当の目的ってところもおなじだ。

雄二は薄々気づいているようだが。

まあ、当日にならなきゃ詳しいことは気づかれないだろう。

第二十二問

第二十二問

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「それはお前たちが言えることじゃないけど」

「そうっすよ」

清涼祭初日の朝。

いつもの汚い教室は、中華風の喫茶店へと姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内に設置されているテーブルは、最初はクラスのみかん箱を使うつもりだったが、時間が余った僕が木材で作ったテーブルを使っている。

「あ、それは七伏君が作ったテーブルに、木下君が綺麗なクロスを持ってきて、手際よく作ってくれたんですよ」

クロスの布は演劇部で使っている小道具なので、なかなか良さそう

な生地だ。

「うーん、ハクはさすがっすね」

なぜAクラスのメープルがここにいるかという点、霧島さんに頼んでFクラスの手伝いをする許可をもらったそうだ。

もちろんAクラスの宣伝もしている。

「時間がなくてニスは塗れなかったけどね」

いつの間にかムッツリーニが胡麻団子をもって近くに来ていた。

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

ムッツリーニは気配が薄いので、明久はいきなり現れたように思えて驚いてた。

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

そうやってムッツリーニは手に持っていた。胡麻団子を差し出した。きた。

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

「いただきます」

秀吉達と一緒にお盆の上の胡麻団子を手取る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「……………（モグモグ）」

「ハクも満足してるみたいっす」

僕の中では甘い＝うまいが成り立つ。

よってこれは甘い（うまい）。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

「ハク、食べかけで良いならこれ食べるっすか？」

「もちろん」

すると、口のまえに胡麻団子が差し出される。

「はい、あーんっす」

「……………（パク）」

かなり恥ずかしいので無言で食べる。

周りから強烈な殺気を感じるが睨みつけたらある程度緩和された。

一人で殲滅したのがこんなところで役に立ったようだ。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。お帰り」

「喫茶店はいつでもいけるな？」

「無論だよ」

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリーニに任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？あ、うん。色々あってね」

学園長から出場理由についての口止めはされているので、下手なことは言えない。

「もしかして、賞品が目的とか……？」

「うーん。一応そういうことになるかな」

詳しく言うと、賞品と設備の交換が目的だね。

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

島田さんの目が細くなった。これは攻撃色だ。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っていたんですか？」

気がつくとも姫路さんも戦闘モード。

「だ、誰と行くって言われても……」

「明久は俺と行くつもりなんだ」

明久が返答に迷っていると、雄二が助け船？を出した。

「え？坂本とペアチケットで『幸せになりに』行くの……？」

「俺は何度も断っているんだがな」

助け船というよりは明久を追い詰めたかったただけだな。

「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉は凄く引かかる！それと秀吉！少しでも寂しそうな表情をしないでよ！」

このままこの誤解が広まると明久は同性愛の似合いそうな人ランキングが上がることになるのだろう。

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「それができれば明久だって苦労はしていないさ」

「雄二、もっともらしくそんなことを言わないで！全然フォローになってないから！」

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「……くっ！と、とにかく、誤解だからね！」

自分の意見を真っ向から無視される明久を見て、僕はある決心をした。

明久の幸せをサポートしてやろう。さすがに不憫すぎる。

それはともかく、僕もそろそろ試合なので行平と合流するため教室を出る。

第二十三問

第二十三問

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージで、召喚大会は催される。

僕達のBブロックは、立ち会いの先生の関係上、明久達のDブロックとは科目が異なる。

僕達の一回戦は英語。行平も僕も得意科目ではない。

「では、召喚してください」

「」「」「試験召喚」「」

さて、こらへんで僕達の召喚大会の目的を整理しておこう。

まず、僕達の目的は優勝賞品の『黄金の腕輪』。

腕輪の能力は召喚フィールド作成と、特殊能力『攻撃追加』と『滑走移動』だそうだ。

フィールド作成をするには500点以上必要だが、特殊能力の使用には400点あれば問題ないらしい。

次に、明久達を準優勝させなくてはいけない。学園長の作った『白金の腕輪』は高得点者が使うと暴走してしまう。腕輪を使っても暴走しない準優勝することのできる低得点者、それが明久達。

つまり、明久達とは決勝以外で当たることはない。

明久は準優勝との交換条件で、姫路さんの転校を防ぐことが本当の目的だが、僕にとってはどうでも良いことなので、とにかく優勝することが目的だ。

ある程度考えをまとめたところで、点数が表示される。

『Bクラス 田中太一
英語 165点

&

Bクラス 平林拓人
英語 173点

VS

Aクラス 七伏行平
英語 452点

&

Fクラス 七伏博人
英語 448点』

開始と同時に走り出し、相手が動くまえに胴を真っ二つにして、おまけで四肢と頭を切り落とす。

これで一体目撃破。

すかさず二体目の背後に回り、羽交い締めにする。
いきなり倒すのも面白くないので、行平の訓練をする。

「右手」

僕がそう言うのと、相手の召喚獣の右手が行平のボウガンによって撃たれた。
少し中心からずれているが、召喚獣でこの精度なのはすごいことだろう。

「左手」

今度は左手の中心に風穴ができる。
というか召喚獣を使ってこの銃弾を弾いたことのある僕って結構人外なんじゃ……………

「両足」

続けざまに二発の銃弾が放たれ、2つの風穴があく。
相手の召喚獣の上に放り投げ、次の被弾場所を指定する。

「両手両足の付け根」

またも寸分違わず命中する。
行平のボウガンの一度に装填できる弾は8発なので、次の弾の装填をしていた。

「額」

最後の一撃が召喚獣の頭を貫き、勝負が決まった。

「勝者、七伏兄弟」

「いやあ、それにしても楽しかったね」

「Bクラス相手に無傷で勝てる方がおかしいんですよ」

まあいいや。僕がおかしいのは元からだし。

それよりもクラスの喫茶店がどうなっているかが気になる。

「それでは私は教室に戻らねばなりませんので」

「うん。次もしっかり暴れよう」

行平と別れて教室に行くと、中から大きな声が聞こえてきた。

『こんなモン食えるわけないだろ!』

『まずいしな!』

なるほど、営業妨害か。

「責任者はいないのか! このクラスの代表ゴペツ!」

「代表は今はいませんので、私が代わりとさせていただきます。何かご不満な点でもございましたか?」

ホテルのウェイターのように恭しく頭を下げる。口調は行平の真似をすれば良い。

「不満も何も、今連れが足払いされたんだが……」

そんな些細なことは気にするまでもない。

「それは私の『足払いから始まる交渉術』に対する冒瀆ですか？」

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！何が交渉術ふぎゃあっ！」

ガスッ！

「そして『鳩尾強打でつなぐ交渉術』です。最後には『鳩尾強打（強化版）で締める交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか！？」

夏川の髪型は坊主。常村の髪型はモヒカン。
記憶完了だ。

「それで、交渉はまだ続行しますか？」

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらおう」

賢明な判断だけどーー

「そうですか。それではーーー」

手遅れだ。

「おいっ！俺もう何もしてないよな！？どうしてそんなげぶるあつ
！」

「ーーこれにて交渉は終了です」

膝で思いつきり鳩尾を強打。短時間で二度食らったわけだから痛いだろうな。

「お、覚えてろよっ！」

倒れた夏川を抱えて走り去っていく常村。ありきたりな捨て台詞で覚える気にもならない。

客に少なからず迷惑がかかったので、謝罪と商品を半額にして提供することで場を治めた。

第二十三問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第二十四問

第二十四問

召喚大会二回戦は、一人一殺で一撃で片付いた。

クラスに戻ってみると、明久達と小さな女の子がいた。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに――」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「ぶあっ！」」

ナイスコンビネーションだ。

「瑞希。そのまま首を真後ろにひねって。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

このままだと明久が殺されるので、介入する。

「落ち着いて、二人とも。だいたい明久がそんなことするわけないと思うよ」

「仕方ないわね。包丁を五本差したら話を聞いてあげるわ」

包丁×5Ⅱ致命傷

「絶対話聞く気ないよね」

「じゃあ一本で良いわ」

包丁Ⅱ刃物……一本でも危険。

「本数の問題じゃない」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と、葉月といていた女の子が島田さんを見て涙を引っ込めていた。島田さんに対してお姉ちゃんと言っていたことと、容姿から、島田さんの妹と思われる。

「ああっ！あのとときのぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

どうやら明久は会ったことのある島田妹のことを忘れていたようだ。

「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

やはり予想通りか。

「それにしても博人、さっきは助かったよ」

「今までは明久が酷い目にあうのを見るのはまあまあ面白いな〜とか思ってたんだけど、明久を幸福にするという超難問をやってみようと思ったんだよ」

「超難問って言われるほど僕は不幸なの？」

なにをいまさら。

「まあ、というわけでこれからは明久の味方をするよ」

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

確かにこの教室には客が少ない。いくら何でも不自然だ。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話をきいたよ？」
「ん？どんな話だ？」

雄二が屈み込んで視線を合わせながら島田妹に問う。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

と、そんなことを聞いていると僕の携帯が鳴った。

カナカナカナカナ

着信音はヒグラシ。ということはメープルからだ。

「どうしたの？」

『Fクラスに対しての営業妨害っす！』

「場所は何？」

『ちよつと挨拶にいった、Aクラスっす』

「わかった。すぐに向かうよ」

明久達は島田妹からの情報をうけて、すでに走り出していた。短いスカートという単語が聞こえた気がするがこの際無視だ。

第二十五問

第二十五問

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来てなにいつているのさ！早く中に入るよ！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

Aクラスの出し物は【メイド喫茶 『ご主人様とお呼び！』】というウチの【中華喫茶『ヨーロッパアン』】と良い勝負のネーミングセンスだった。

「ハク、ここでモヒカンと坊主が営業妨害してるっす」

モヒカンと坊主というと常夏コンビか。

「またあいつらか……」

「『また』ということは以前も？」

「うん。僕が追い出したけどね。そういえば召喚大会の方は？」

「問題ないっす」

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

話をしていると、島田さんを先頭にして中に入っていくので、それに続く。

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

僕たちを出迎えてくれたのは霧島さんだ。
それを知ってか雄二が渋々入ってくる。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

これはマニュアル通りの対応ではないはずだ。

席に案内され、立派な装丁のメニューを渡される。
Aクラスは学校行事にも真面目なようだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

この三人は仲良くシフォンケーキのようだ。

「『アイスココア』っす」

「僕は『アイスティー』。ガムシロップは二つで」

ガムシロップは一つでは足りないので、いつも二つ入れる。
なんてったって無料だし。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「んじゃ、俺はー」

「……ご注文を繰り返します」

雄二の注文を霧島さんが途中で遮る。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『アイスココア』『アイスティー』『水』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

え?何も問題なかったと思うけど。

「では食器をご用意いたします」

もちろん雄二の食器は実印と朱肉だ。

「しよ、翔子!これ本当にうちの実印だぞ!どうやって手に入れたんだ!？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

霧島さんがお辞儀をしてキッチンに歩いていくと、入れ違いに行平がやってきた。

「おや、博人。いらっしゃいませ」

「あ、行平。何か新情報あった？」

「そうですね……次の対戦相手の情報が少しあります」

対戦相手の情報か。知っておいて損はないだろう。

「次の相手はDクラスのペアですが、一人はAクラスレベルの実力です」

「Aクラスレベルなら試召戦争のときに難関となったはずだけど」

「どうやら試召戦争の日は風邪だったようです。それと、Dクラスにいる理由ですが、聞いた話だとテスト中にシャーペンが折れたり

解答欄を間違えたりと、恐ろしく不幸だったようです」

そんな不幸スキルを持っているなら口癖は『不幸だぁー！』だろう。実際そんなことはないだろうけど。

そんなことを考えていると常夏コンビ対策のためか雄二がメイド服を持っていた。

「着るのは明久、お前とー」

「いやぁぁぁっ！」

絶叫する明久を無視して雄二の首腕を回していつでも締められるようにする。

「で、雄二？明久とだれナノカナ？」

おそらくこいつのことだから僕にもメイド服を着せるつもりだったのだろう。

「くっ！こうなったら……楓、お前は博人のメイド服を見たくはないか？」

卑怯な！メーブルを味方につけようとするとは。

「なにいつてるすか雄二君。そんな大切なものを衆愚にさらす必要はないっす」

「助けてくれてありがとうなんだけど否定はしないんだ」

つまり二人きりだったら見たいということだろう。

「というわけで明久。メイド服を着て醜態をさらしてください。大丈夫ですよ。あなたの人生に忘れられない汚点がつくだけですから」
行平がニツコリ笑顔で明久の心を抉る。

とりあえず明久を女装させるためAクラスを出て、トイレへ向かった。

明久の女装姿は酷いものではなく、秀吉のメイク技術のおかげもあり、なかなか似合っていた。

そんな明久を行平が写真に撮り、良い交渉材料が手に入りましたと
いって笑っていた。

明久がバックドロップを決めてから、痴漢されたと大声をあげたことにより、痴漢退治という名目で雄二が攻撃を仕掛けたが、最終的には逃げられてしまった。

第二十六問

第二十六問

召喚大会第三回戦。科目は数学。

「「「試獣召喚」」」

おなじみの魔法陣から、召喚獣が現れる。

『Dクラス 清水美春
数学 94点

&

Dクラス 浅井 海渡
数学 411点

VS

Aクラス 七伏行平
数学 439点

&

Fクラス 七伏博人
数学 621点』

「うっわ、これは厳しいな」

「大丈夫です。海渡がいますから」

相手の召喚獣は、清水さんは剣と日本風の鎧という標準的な装備な

のだが、もう一人は急所に突いている装甲が防具で武器は――――
ーネギだ。

「……………なんでネギ？」

思ったことを素直に口に出してみる。

「なんかバグだって話だ。格好いいだろ、これ。『ネギ』の『ナギ
ナタ』つまり『ネギナタ』というわけだ」

浅井はネギナタを回転させてポーズをとってくる。

「それでは、良い試合をお願いします」

軽い雑談が終わり、勝負が始まる。

僕はもちろん開始と同時に攻撃を仕掛ける。

初撃をかわされるが二撃目はネギナタと打ち合った。

ネギとぶつかったはずなのに、金属同士をぶつけた音がする。

……………意外と強いかもしれない、ネギナタ。

僕が浅井を攻撃している間に、清水さんは行平に走っていった。

遠距離型の行平は近距離戦に持ち込まれると戦いにくい。

しかしそこは行平の実力でカバーする。

ボウガンを槍のように構え、突きで攻撃した。

清水さんの召喚獣は剣で攻撃を防いだが、点数差があるので吹き飛ぶ。

ちょうど僕の方に向かってくるので、浅井の方を向いたまま肘のブ

レードで後ろから飛んできた清水さんを串刺しにする。

清水さんに注意が少し逸れたので、防戦一方だった浅井が反撃してくる。

相手の攻撃を全て捌くが、体勢が悪いので一旦退く。
距離をとる隙は行平が狙撃して作る。

二体一で不利な状況だからか、浅井は別のアクションをしてきた。

「武器追加！」

どうやら腕輪の能力のようだ。

その言葉の通り、浅井の召喚獣はもう一つ武器を手に使っていた。

.....ゴボウ

今度の武器はゴボウだった。

「あれ！？俺イメージでは剣だそうと思ったんだけど！？」

能力を使った本人もゴボウに驚いていた。

「まあ良い、これで仕切り直しだ！」

ゴボウとネギを構えてつつこんでくる。

攻撃をすべてかわすが、相手もそれを予想していたようで、次の攻撃を仕掛けてきた。

「武器追加！」

.....ジャガイモ

空中に現れたジャガイモをゴボウで叩きつけて、ものすごい勢いでジャガイモが飛んできた。

体勢が悪く避けきれないので、防御する。

しかし、鈍い音を立てて当たったジャガイモに弾き飛ばされてしまった。

.....なぜジャガイモで鈍い音がするのかわからない。

「よっしゃもう一発！武器追加！」

.....ニンジン

瑞々しいニンジンが現れ、それは行平へ一直線に進んでいった。

行平はこれを撃ち落とし回避する。

ニンジン投擲で隙ができたので、接近して斬り続ける。

防御姿勢の浅井にネギとゴボウでふせがれるが、僕は囧だ。

僕の召喚獣の頭のすぐ横を通り、弾丸が浅井の召喚獣の頭を打ち抜く。

これで僕たちの勝利だ。

『勝者、七伏兄弟』

「いやー良い勝負だったぞ」

ステージを降りた僕たちは、浅井と雑談をしていた。

「うん。僕も面白かったよ、浅井」

「海渡でかまわねえよ、博人、行平」

「わかったよ、海渡」

「ところで、どうして清水さんと組んで出場していたんですか？」

「ああ、俺と美春は幼なじみなんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「盛り上がってきたところですが、私もクラスの手伝いをしなければなりません。ここで失礼します」

「また戦えるのを楽しみにしてるよ」

「おう、また戦ろうぜ」

勝負の中で仲良くなった海渡とわかれ、Fクラスの教室に向かう。

Fクラスに戻ると、出迎えたのはチャイナドレスだった。

第二十七問

第二十七問

「ハク、おかえりーっす」

教室に戻った僕を出迎えてくれたのはチャイナドレスに着替えたメープルだった。

「……………」

「おや、どうしたっすか？ 私のチャイナドレス姿に見とれたっすか？」

「え？ あ、あ、うん」

しまった！ っていうっかり本音が！

「ふえっ！？ な、なにいつてるすか！」

メープルも僕の言葉に驚いたのか、二人とも顔が真っ赤になってしまった。

赤面したメープルも可愛いと思う。

「フッフッフ、ハクもついに素直になったっすか。このまま欲求に素直になっちゃおう？」

「それはない」

節度を守ったお付き合いをしましょう。

「ま、冗談はここまでにして、試召大会勝ち抜きお疲れ様っす」

「うん、ありがとう。メーブルも勝ち続けているんだよね」

「当たり前っす」

こうやって平和な会話をしていると、教頭竹原の陰謀とかはどうでもよくなってくる。実際それは明久達が解決する問題だし。

「おう、召喚大会は順調だね」

僕たちの問題はこの秋音姉からの依頼だ。

ちなみに秋音姉は手伝いということでチャイナドレスに着替えていた。

「これで私の給料ダウンが一步遠のいたね」

はつきり言って一発シバきたい。

しかしここは大人な対応をしなければ。

「あ、そういえば一日目の清涼祭の様子をHPに載せるから、見回りして写真撮ってきて」

そう言ってデジタルカメラを渡された。

それじゃあメーブルと一緒に行ってこようかな。

雄二に見回りの旨を伝えて教室を出て行く。

「どこ行きたい？」

「まずは外の運動系に行った方がいいんじゃないっすか？」

うん、やっぱりそうだね。

というわけでやってきた野球部のストラックアウト。
召喚大会の会場の近くとあってなかなか盛況だ。

「そんじゃ、いきます」

第一球を振りかぶって軽めで投げる。

肩が暖まってないのでいきなり速く投げてはいけない。

ボールは左上の一番を打ち抜く。

続いて二球目三球目で2，3番を打ち抜く。

そろそろなれてきたので細かい技をやる。

四番と五番の間のフレームに当てて、二枚落とす。これにはまわりから歓声があがる。

残りも四枚も二枚抜き二回で簡単におわってしまった。
その後野球部から勧誘されたが丁寧に断っておいた。

「さすがハクっす！」

メープルはこの状況を利用して抱きつこうとしてくるが、軽く受け流す。

色々な出し物をまわって、現在3-C。クイズ大会だ。

二人一組のペアで、クイズに答えていくという簡単なものだ。

「それでは第一問。第二次世界大戦で初めてつかわれた兵器を三つあげよ」

「戦車、飛行機、毒ガス」

「正解です！」

よし、一問クリアー。

「第二問。農薬の危険性について書かれた『沈黙の春』の著者はだれか」

「レイチェル・カーソン」

「正解です！」

今回はメープルが答えた。

「第三問です。マグニチュードが一大きくなるごとにエネルギーは何倍になる？」

「約三十二倍」

「またまた正解です！」

これで僕たちのペアは三問連続正解だ。

ピンポン

「文芸復興」

「正解です」

ピンポン

「ウェルウィッチア」

「正解です！」

ピンポン

「竹取の翁」

「またまた正解です」

ピンポン

「1392年」

「正解です！」

ピンポン

「フビライ・ハン」

「せーかいです」

ピンポン

「fall」

「正解」

ピンポン

「三畳紀、ジュラ紀、白亜紀」

「正解です！」

問題内容は適当に想像してほしい。

なんか適当にやってたら十問連続正解で他の人に一回も答えさせなかった

「それでは商品の『図書券』です」

係の生徒から賞品を受け取る。

まだまだ見回りをしなくちゃいけないので、先を急ぐ。

第二十八問

第二十八問

ちょうど見回りが終わった頃に召喚大会第四回戦になった。

相手は三年生のAクラスだったが、難無く撃破。これでつぎは準決勝だ。

教室に戻ると、みんなあわただしく行動していた。

「ハク！大変っす！」

僕の姿を確認するなり、メープルが近づいてきた。メープルは周りに聞こえないよう小さめの声で話してきた。

「ウェイトレスがさらわれちゃったっす」

ほほう、これはまた予想通りな……

「メープルは大丈夫だったんだよね」

「もちろんっす。秋音さんは事前に察知して、私と一緒に少し席を外していたっす」

全員を逃がすと誘拐犯がどんな行動をとってくるかわからないから、喫茶店の戦力として一人を残したというわけか。

「何にしてもメープルが無事で良かったよ」

「誘拐されそうになったということは心に深い傷をのこしていったっす♪」

……………どうしよう、なんかいやな予感がある。

選択肢？スルー

選択肢？心の傷について聞く

？は後々怖そうなので2番を選択。

「その心の傷はどうすれば治るの？」

「ハクとイチヤイチヤしたらっす」

うん、だいたい予想通り。

「じゃあ、後でね」

「やったっす。約束っすよ？」

「うん、だからはやく秋音姉を手伝ってあげて」

メープルが僕のところにいると、現在動けるウェイトレスは秋音姉だけになってしまう。

「了解っす！」

メープルは上機嫌な様子で接客を始めた。

……………帰ったらどうしよう？

少し時間がたったら、また召喚大会の時間になった。
準決勝は僕達とメープルの試合。

正直とても楽しみだ。

中華喫茶をFクラスのメンバーに任せ、会場に向かう。誘拐された人たちも明久達が助けに行ったから、そろそろ戻ってくるだろう。

『それでは、召喚大会準決勝を始めます』

ステージの上で、メープルと向き合う。

真剣勝負ゆえに特に雑談はしない。

『Aクラス 工藤愛子

保健体育 463点

&

Aクラス 佐藤楓

保健体育 428点

VS

Aクラス 七伏行平

保健体育 444点

&

Fクラス 七伏博人
保健体育 438点』

点数に大きな開きはない。

つまりこの戦いで重要なのは、召喚獣の扱い方だ。

目前の勝負に向け、集中する。

『始め!』

いつも通り、開始と同時に攻撃を仕掛ける。

狙いはメープルだ。

しかし、メープルもこの一手を読んで、僕の召喚獣に刀を全力で叩き込んできた。

お互いの攻撃は相殺したが、僕の召喚獣は軽いので、少し弾き飛ばされた。

体勢が崩れた僕に攻撃を仕掛けようとしてくるが、行平の援護射撃で体勢を立て直す。

その間に愛子が行平に向かっていったので、僕はメープルに集中する。

とにかく連続攻撃で相手の攻撃の隙を奪うが、さすがはメープルとあったところで、時々僕の攻撃の合間を縫って攻撃してくる。

両方決定打はなく、お互いの点数を少しずつ削り合っている。

side 行平

博人を援護したのは良かったのですが、愛子さんにだいぶ接近されてしまいました。

相手が振り回してくる巨大な斧に対して、ボウガンを使って受け流します。

相手が武器を振り切ってきた隙に弾丸を一発打ち込みますが、さすがに一撃とはいかず、大きく点数を削るだけでした。

点数を大きく削られた愛子さんは短期決戦に持ち込むため、腕輪の能力を使い、斧に電撃を宿してきました。

……………どうしようかね。

side 博人

メーブルと点数を削りあっていると、行平達の方に動きがあった。

点数を大きく削られた愛子が腕輪を使って勝負に出たのだ。

その斧が当たる瞬間、行平はあるキーワードを口にした。

「防御」

愛子の斧は行平の召喚獣に当たることなく弾かれた。

行平の腕輪の能力『絶対防御』だ。

当然弾かれれば隙はできるので、行平は正確に頭を打ち抜き勝負を決した。

試合の流れが変わったからか、メープルは一度距離をとってきた。

僕とメープルが今持っている武器は近接用。距離があいたら、攻撃はできないはずだ。

しかし、メープルにはこの距離で攻撃する方法があった。

「砲撃！」

メープルの刀の先から紫色の球が飛んでくる。

いやな予感がして、それをかわすと、目前にメープルが迫っていた。

「来い、マイマイカブリ」

召喚獣の半分ほどの大きさの昆虫で攻撃を受け止める。

「拡散！」

メープルがさっきとは違うキーワードを言う。

今度はさっきとは違い、紫色の霧がメープルの周りに広った。

僕はそれに当たってしまい、点数を確認すると点数が減っていった。

「私の能力の『毒』っす。砲撃、拡散と攻撃方法は色々あるっす」

説明を聞きながらも攻撃する。

時間がたつごとに点数が減っていく。

もう時間がないので、最後になるであろう攻撃をする。

まずは行平がこちらに突っ込みながら狙撃をする。

動きが止まったところで全体重でクローを叩き込む。

決死の攻撃はメーブルの盾によって防御されてしまったが、これで詰みだ。

後ろに回ったマイマイカブリがメーブルの召喚獣胴体を切り裂く。

『勝者、七伏兄弟』

第二十八問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第二十九問

第二十九問

清涼祭一日目が終わり、僕達の貸し切り状態となっているFクラスの教室。

テーブルでお菓子を食べていると、急に雄二が告げた。

「明久。そろそろ来る時間だぞ」

「？来るって、誰が？」

「ババアだ」

というか学園長が来ないんだったらこんな教室に残っている必要はない。

「学園長がわざわざここに来るの？」

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせろ』ってな」

「話ねえ……。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

一応ではなく、確実に目上だ。

「用事もクソも……この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因がーえええっ!？」

雄二が当然のように告げた当然の事実にも明久は驚いていた。

「あ、あのババア!僕らに何か隠してたのか!」

そもそも何をもってババアー学園長に隠し事が無いと判断したんだ。

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

声と同時に教室のドアが開いて学園長が、続いて右脇に秋音姉を抱えた行平が入ってきた。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め!」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい?」

まあ学園長はどうでも良い。気になるのは別の方だ。

「行平、利き手を使えるように抱えるのは左脇が良いと思う」

「いや、そもそも抱えていることにつっこむべきです!」

こっちでワイワイやってるのを無視して雄二は学園長と話をしていた。

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは十分な裏切りだと思うがな」

「ふむ……。やれやれ。賢しいヤツだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引きを持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を出せるヤツ……それこそ『七伏兄弟』とかを使えばいいわけだからな」

「あ、そういえばそうだね。準優勝者に後から事情を話して譲ってもらったのかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

「話を引き受けてきた教頭の手前おっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい?」

「それなら教室の補修に関して渋ったりしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が必要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋ったってこと?」

「そういうことになるな」

話が長くなったのでまとめると、教頭が準優勝賞品の『白金の腕輪』を暴走させ、学園長の失脚を狙っていて、それを阻止できる明久達の妨害をしたということだ。

話が一旦終わって今度は秋音姉が話し始める。

「一応優勝賞品の『黄金の腕輪』も欠陥があって、その影響を受けない博君達に優勝をしてもらうんだよ。こっちが妨害を受けなかったのは、優勝の阻止が難しいのと、欠陥が大したことないからだね」

「これでアタシ達の説明は終わりだ。二人とも、明日は頼んだよ」

明久達にはまだ、準決勝が残っている。相手は教頭側の人間。これに勝たないと学園の存続が危うい。

「腕輪の色はカラスプレーで誤魔化せるし、能力の発表もしていないから、どっちが優勝しても良い。だから、明日は本気で戦おう」
「もちろん！」

無事帰宅、したはずなのだが――

「さあて、何して貰おっかなあ？」

ベットで寝てたらいきなりメープルに馬乗りされて動けない状態だ。

結構頑張れば抜けられなくもないが、メープルに怪我をさせてしまう可能性があるのでやめておく。

さて、どうする？ 僕。続きはwebで。なんて言ってもらえない。

「ええと……まずはゆっくり話がしたいからー」

口をキスによってふさがれたため、最後まで言い切れなかった。

……え！？ 何この状況？

「……………ん……………む……………」

舌まで入れられた。いったいどうしろっていうんだ！？

「えーと、一応ここは僕と行平の共同の寝室だから……」

部屋に標本や飼育ケースを置きまくっていたら、寝るスペースがなくなってしまったからだ。

行平もだいたい似たような感じで色々置いてある。

「根回しはもうしてあるから気にしないでいいの」

万事休すと言いやうがない。

「フッフ、それじゃあー」

その後はまあ……そういうことがあったということでご想像にお任せします。

設定？

設定？

『浅井海渡』

所属…二年Dクラス

身長174cm

得意科目…数学、物理

趣味…喫茶店手伝い、パズル

特技…お菓子作り

好きな物(事)…パズル、美春、物作り

嫌いな物(事)…不幸

召喚獣…防具は作業服(何故か防御力が高く、鎧位重い)で、武器はネギナタ

その他…清水美春の幼なじみで、彼女のことが好き。『ラペデイス』の副店長を任され、美春父からの信頼もあつい。テスト中にシャーパーンが折れて(四教科連続)Dクラスへ。

『黄金の腕輪』

フィールド作成ができる。教科は最初に設定した一つのみ。点数消費は一回に一点程度。使用者自信も召喚できる。『干渉』されない。

(博人ver)フィールド科目…生物

能力『攻撃追加』。自動で発動し、攻撃の範囲を広げる。アクションによって特殊効果がでることも。

(行平ver)フィールド科目…地理

能力『滑走移動』。自動発動で、召喚獣の重心を感じて移動する。狙撃の反動により、足が止まる行平と相性の良い能力。

メーブルの能力『毒攻撃』

相手を毒状態にして体力を奪い続ける。毒を負った召喚獣が死亡すると、死亡と同時に毒の爆発をする。

砲撃、拡散など、毒を打ち出す方法はいくつかある。

行平の能力『絶対防御』

相手の攻撃を弾く結界を作る。一度の使用で二十点ほど消費する。

第三十問

第三十問

清涼祭二日目。僕たちはステージの上で、準決勝を勝ち目的を果たした明久達と向かい合っていた。

『召喚大会決勝戦、勝ち上がってきた中にはFクラスが三人！これはFクラスが最低であるという認識を改める必要があるかもしれない』

司会の声を無視して意識を集中させる。ただ目の前の敵を倒すために。

『それでは召喚を開始してください』

「」「」「試獣召喚」「」

『Fクラス 吉井明久

現代国語 67点

&

Fクラス 坂本雄二

現代国語 183点

VS

Aクラス 七伏行平

現代国語 463点

&

Fクラス 七伏博人

現代国語 458点』

点数の差は一目瞭然。圧倒的だ。

『開始！』

合図と同時に走り出す。クローで斬りかかるが明久は予想していたのか大きく横に跳んだ。

僕の攻撃を予測していたのはいいが、回避動作は大きかった。その隙を逃さず攻撃を掛けるが、雄二が割って入ってきた。

「しっかりしろ！明久！」

雄二の点数は高い方だが、それでも僕には劣る。一対一なら三十秒持てばいい方だ。

ドンドン点数が削られている雄二の援護に明久が木刀で突きを繰り返して出る。

それにピッタリ位置をあわせクローの突きを放つ。

真正面からクローとぶつかった木刀は二つに裂け、明久自身もダメージを追った。

雄二が構えをつくって攻撃準備をしているので、ある指示を行平に出す。

それを受けた行平は『僕』に銃弾を放った。

飛んできたそれをブレードで雄二の方向に弾く。
弾丸は肩に当たり、雄二の攻撃は失敗に終わった。

明久、雄二が傷つき動きを止めたところに突っ込み、暴れる。

斬り、貫き、刻み、断ち、潰し、砕き、裂く。圧倒的な力で、場を支配する。

ちなみにこの技を生身でやろうとすると、関節が激痛で動けなくなるだろう。現に点数も50程減ったし。

最終的にフィールドに残ったのは、僕と行平。

『七伏兄弟の勝利です!』

これでミッション完了。残るは腕輪のデモンストレーションだ。

学園長から表彰を受け、もらった腕輪を着ける。
ステージの上なので、観客の方に四人で並ぶ。

アウエイクン
「起動!」

まずは雄二の白金の腕輪で召喚フィールドを形成する。

「試獣召喚! それに…二重^{ダブル}召喚!」

続いて明久が二体の召喚獣を呼ぶ。

一旦歓声がやむのを待ち、僕達の番。

アウエイクン

「起動」

黄金の腕輪が形成したフィールドが雄二の作ったフィールドを消し去る。

これが黄金の腕輪の能力の一つ『干涉不可』だ。

「試獣召喚！」

続いて召喚獣を呼び出し、武器を振るうと、武器の通った外側にエフェクトが出た。

『攻撃追加』、攻撃範囲を広げる能力だ。エフェクトの出た場所は攻撃が発生している。

モーションによって特殊効果もあるらしいが、今回は省く。

一旦フィールドを消し、行平が腕輪を起動する。

アウエイクン

「起動……………」
「試獣召喚」

行平の召喚獣はボウガンを構えたまま足を動かさずにフィールドを動き回った。

能力『滑走移動』。その名の通りフィールドを滑る力だ。ちなみに1mにつき1点消費する。

以上でデモンストレーションは終わりだ。

召喚大会は終わったが、まだまだ清涼祭は続くので、教室で忙しく仕事をする。

第三十一問

第三十一問

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

ノックと挨拶をして、明久達が学園長室に入ってくる。
さすがにもう少し気を遣うべきだ。

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

「そう？きちんとノックをして挨拶をしたけど？」

確かに雄二よりはマトモだった。

「明久。返事を待ってから部屋に入るんだよ」

「あ、そうだったね。ところで学園長、準優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかっているよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思っているんだい？」

学園長ももうちょっと言葉遣いを気をつけてほしい。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい
拝んでもぼちはあたらなはずだ」

「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「む？不具合とはなんじゃ？」

「あ、そっか。秀吉は知らなかったんだね。この白金の腕輪はちょっと欠陥品でね、得点の高い人が使うと暴走しちゃうんだよ」

「そうじゃったのか」

それにしてもどうして明久はそんな重要な事をただ被害にあったっ
てだけで他人に話すのかな。

「明久、言葉には気をつけた方が良く。この部屋には盗聴器が仕掛
けられていたんだ。もし破壊していなかったらこんな話を録音され
てまた学校の存続の危機だよ？」

「まあ、結果的には良かったんだから、これでいいさね」

「話は終わったことだし、早く打ち上げにいつてきな。僕もすぐに
追いつくよ」

「ああ、わかった」

雄二が礼もせずに部屋を出ていく。明久達はキッチンと礼をした。

学園長の椅子の右後ろから、明久達を見送る。
ちなみにここが僕のいつもの立ち位置だ。

あ、そういえば学園長に話があったんだ。

「学園長、教頭の悪事の資料、集めておきましたよ」

脇に抱えていたファイルを机の上に置く。

「そいつはありがたいね」

「でさ、博君にはもう一つ用事があるんだよね。じつは召喚獣の実験を生徒に手伝ってもらおうとおもってね。『無作為』に選んだ結果、博君となったのでした！」

秋音姉は無邪気な面で微笑みかけてくるが、明らかに故意的に選んだだろう。

「それってどんなの？」

メリットを聞かなくちゃ受ける気にはならない。

「まずは暴走対策として、システムの別領域になると、召喚獣に何かあっても強制的に動かせるように召喚者との繋がりを強くするの。これで操作性は大幅に向上するけど、フィードバックが発生しちゃうね」

操作性の向上か……僕にとってはとても良い話だ。

「ま、面白いならいいよ」

「そう言うと思ってたよ」

「それじゃあ学園長。僕も打ち上げなので、これで失礼します」
「ああ、楽しんでおいで」

というわけで打ち上げ会場の公園。

手渡されたコップに何故か入っていた酒を捨て、持参したココアを飲む。

というかこいつらはなんで酒を買ってきたんだ？

するとそこに、背中から軽い衝撃が来た。

「ハク！遅いっす」

と、メープルがにっこり笑みを浮かべていることに油断して足払いをされていることに反応できなかった。しかも馬乗りさえしたし。いつもなら軽く避けられるはずなのだが……。どうやら最近は一プルと一緒にだと、少し気が緩んでしまうようだ。

「で、なんでこうなったの？」
「とくに理由はないっす」

キレて良い？キレて良いよね！？

……まあ、メープル相手にそれはできないんだけど。

「フフフ。今の私はお酒で酔ってるから、何しちゃうかわかんないなあ？」

「全く酔ってないように見えるのはどうしてだろうね」

おそらく飲んだとしても、ほんの少し口を付けたくらいだろう。

「おや、信じてくれないの？」

「もちろん」

「それでこそ私の好きなハクだよ」

僕は昔から信じると言ったことはない。そもそも僕は何も信じたくない。

信じることは可能性が限られる。それでは真実にたどり着くのは難しい。だから疑う事で得られる数多の可能性あら真実を探りたい。それが僕の考え。

だって僕は知ることを常に望んでいるから。

「そんなことは置いといて、私は今何をしようかって考えてるところなの」

「僕を解放するってのは？」

希望を込めて言ってみる。

「どうしよっかな………周りの目があるから……」

華麗にスルーされた。それと周りの目がなかったらどうする気なんだろう？

と考えていたところで、いきなりキスされた。二分くらい。

「ご馳走さま。んじゃ、みんなと一緒に楽しんでこよう？」

「……………うん。そうだね」

少し間が空いたのはドキドキしていたからではない。決して。

その後、暴行されそうになった明久を助けたり、面白く過ごした。

のんきと速攻（前書き）

糖分摂取魔さんとのコラボです。

のんきと速攻

のんきと速攻

「うわああああ!!!」

ダダダダダダダダ

ここ、文月学園は高校だ。だけど、今全力疾走していったのは小学
生くらいの身長だったような……………?

「へいへい!面白い物拾ってきたよ」

見た目中学生な物理教師、杉本秋音は召喚実験室で待っていた僕た
ちに、

手を引いて連れてきた小学生?を見せてきた。

「で?その低身長君の何が面白いって?」

「低身長君ではなく月野造です。よろしくお願いします」

「七伏博人。よろしく」

「佐藤楓っす。よろしくお願いするっす」

「七伏行平、博人の双子の兄です。よろしくお願い致します」

これで各自の自己紹介は終了。

それでは、本題に入ろう。

「もう一回聞くけど、月野君の何が面白いの？というかどうかといった経緯で連れてきたの？」

「造君は女性の先生方に大人気でね、今日も洋子先生達に追われてたから、暇つぶしに連れてきたってわけ。で、面白いのは……………物理フィールド展開！」

秋音姉がフィールドを展開すると、ポンッと音を立てて月野君が消えた。

よく見てみると、消えた月野君のかわりに召喚獣いた。

「ほらほら！体が消えて召喚獣に意識が移っちゃうんだよ♪」

へえ…………それは面白いな。是非とも実験…………じゃなくて観察…………でもなくて、調べてみたいな。

「召喚獣に意識ですか…………虐さ…………コホン。手合わせしてみたいですね」

などといきなり行平が言い始めた。

僕も手合わせしたかったのだが…………

「うーん、召喚獣勝負ねえ……うん、許可するよ！ちなみに造君は観察処分者だからね」

「フィードバックありなんてまさに好都合ではないですか。試獣召喚！そして、起動！」

行平は現在物理フィールドがあるのにも関わらず、黄金の腕輪を起動した。

黄金の腕輪のフィールドは干渉が起きず、他のフィールドを破壊する。

よって、現在は地理フィールドとなった。

行平……得意教科で苛めてみたいとかSっ気全開だな。

ちなみに月野君の装備は魔法使いの格好に武器が箒だった。

まあ、召喚獣の強さは見た目では判断できないから、武器だけで弱いと判断はできない。

海渡なんかが良い例だ。

しかし、あの箒で遠距離攻撃は難しいだろう。

そう踏んで、行平は遠距離から正確な狙撃を開始していく。

はつきり言って行平は最も得意な地理では、無敵と言っても良い。

月野君もうまく避けようとしているが、点数を活かして高速で動き

回りながら射撃をする行平の前では点数がだんだん削られていく。

行平が弾の装填中に、月野君は行動を起こした。

「どりゃあああああああああ!!」

月野君の掛け声と共に、行平が吹き飛ばされる。

「クッ……厄介ですね!」

ギリギリの所で体勢を立て直して、『滑走移動』で足場がない状態でも、踏みとどまった。

一旦攻防が終わり、両者共に睨み合いの状況となった。その静寂を破ったのは――

ドバン!

「「造君、大丈夫ですか!?!」」

造君LOVEな先生方だった。

………何このカオス。

「ふむ、形成不利。というよりこの後の展開が予測できるので戦略的撤退させていただきます」

行平は恭しく礼をして、颯爽と去っていった。

そうすると、先生達の怒りは行平に向けられることはなくなり、今度は方向性を変えて別の人物へと襲いかかった。

「造君！何かおかしい部分があるかもしれないので、保健室に行きましょう。いえ、なににもなくても行きましょう！」

「嫌です！」

この会話から、月野君の苦勞が窺えるようだ。

しょうがない、助けよう。

メーブルと秋音姉に目配せして、合図を送る。

まずは秋音姉が閃光弾で軽く視界を奪う。
何故持っているかは聞くべきじゃない。

「ほら、行くよ！」

ぼけっとしていた月野君を拾って肩に担ぐ。

それほど身長が高いわけではない僕でも楽に運べるくらい、月野君は小さかった。

行平にいつも身長で負けてるからちよつと優越感。

後ろから黒いオーラが感じられる恐怖の鬼ごっこだったが、なんとか撒くことに成功した。

「なかなかスリリングでしたね」

いつの間にか合流した行平が全くスリリングを感じたように見えな
い顔で感想を言ってくる。

「さて、今日はせっかく逃げきれたんだから、早く帰った方が良
いだろう」

「今日はありがとうございました七伏君、佐藤さん、杉本先生」

「七伏は二人いるから、僕のことは博人と呼んでもらってかまわな
いよ」

「わかりました。えーと、ハクさん！」

ハクさん……どうやらあだ名のようなだ。

「それでは、私も名前で呼んでください」

「私もメープルと呼んでもらうっす」

「了解です。ユキさん、メーさん。自分のことも、呼び捨てにして
ください」

これで結構親睦は深まったかな？

「何か困ったことがあったら呼んでよ。興味があったら助けるから
さ」

「バイバイっす」

手を振って造と別れる。なかなか面白い人物だったな……。

また合うときが楽しみだ。

ちなみに余談だが、用事があったので校内に戻ったら、先生達にエ
ンカウントして、鬼ごっこ第二弾がスタートした。

のんきと速攻（後書き）

糖分摂取魔さんの『バカとのんきと召喚獣』
面白いので、是非見てください。

僕とメーブルと遊園地

僕とメーブルと遊園地

「ねえねえハク。如月ハイランドはいつ行く？」

「そうだねえ……今週末は空いてるけど」

「じゃあ、今週末にしよう？　そういえばこんな普通っぽいデート始めてだね」

「うん、確かに」

今までのデートは山か図書館か博物館か書店のどれかだ。

お互いの好きなことをした方が楽しめるから、というわけだ。

そして週末、如月ハイランドのゲート前にて。

「ところでメーブル」

「うん、なに？」

「遊園地ってどう楽しむ物なの？」

遊園地ってなにが楽しいんだ？よくわからん。

「私もアトラクションの楽しみ方ってのは微妙だけど、とりあえず、私はハクと一緒に楽しいよ」

ふむ、なるほど。たまにはのんびり一緒に過ごすのも良いだろう。

当日はプレオープンということで、あまり待つことなく係員の前まで進めた。

「いらっしやいマセ！如月ハイランドへようこそ！本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですか？」

「はい、これです。あ、ウェディングシフトは必要ありませんよ」

「了解です」

メーブルがチケットを手渡す。学園長に頼んで上の方に話をしてもらったのだ。もちろん、ここで式を挙げるのを条件で。

………できれば僕にも話を通して欲しかった。

「じゃあまずは……ってあれ？Fクラスのメンバーがいるよ？」

広場の方を見ると、明久、秀吉、ムッツリーニ、島田さん、姫路さんがいた。

「何してんの？」

「あ、博人達も来てたんだ」

このメンバーがここにいるとなると、目的は一つだろう。

「坂本夫妻の結婚の手伝いか……面白そうだね」

「私達もちょっと手伝うっす」

「え？でも二人はデートなんじゃ……」

「私達は面白いのが一番っすから」

というわけで協力が決定。

また後で連絡すると言うことで一旦別れた。

ジェットコースターの運動の計算をしたり、文学的なお化け屋敷のお化けの解説をメールから受けたりして楽しんだ後、明久から電話がかかってきた。

『もしもし博人？ちょっとお願いがあるんだけど』

「うん、どんな内容かな？」

『雄二達の前でイチャイチャして、霧島さんを動かして欲しいんだ』

「了解っす！」

何故かメープルが意気揚々と返事していた。

というかイチャイチャって……………

まあ何言っても仕方ないので作戦決行となった。

雄二と霧島さんが向こうから歩いてきて、タイミングを見計らってメープルが抱きついてきた。

さらさらのメープルの髪が僕の首をくすぐる。

チラッと雄二の方を見るとこちらを観察していた。
さらにメープルは唇を奪ってきた。

「……雄二」

「目を瞑って迫ってくるな！」

霧島さんが感化されたのか、雄二に迫っていたが、ダッシュで逃げ
ていってしまった。

これでだいたいミッション成功なんだけど……

「……んむ……………はぁ……………」

いまだにキスされていた。どうすればいいんだろう？

というかいつもいつでも主導権握られっぱなしのような気がする。

「ふう……………ご馳走さま♪」

「……………で？次はどうするの？」

「うーん……………ってユキじゃないあれ？」

メープルが指差した方には、行平と秋音姉がいた。

どうやら行平のプレミアムチケットを使ったようだ。

「これは……………追跡するしかないね？」

「うん。なかなか楽しめそうだ」

結果……………結構良い感じだった。

「どうしようハク。まさかこんな展開になるなんて」

「まあ、あの二人はあれで良いと思うよ。少なくとも何か言う気はないね」

「うん、そうだね。……………カメラカメラ」

メープルはカバンの中のカメラを探しているようだ。
証拠写真か？それとも後々の交渉材料か？

行平には弱みを握られまくっているから、少しでも役に立つものを集めないと、抵抗すらできない。

ふと時計を見ると、そろそろ帰宅するべき時間となっていた。

「そろそろ帰ろう。メープル」

「うん、楽しかったね」

友人を嵌めたり、追跡したりと普通のデートとは全く違うだろうが、僕にはとても楽しかった楽しかった

手を差し伸べられたので、きちんと手をつないで帰った。

僕とプールと水着姿？

僕とプールと水着姿？

如月ハイランドのデートの翌週、僕は明久の家に行った。

現在はハンティングアクションゲームを楽しんでいる。

「おい、明久！ 罠こっちゃあるんだから速く来い！」

「いまが攻撃チャンスなんだよ！」

「罠にかけたほうが楽だろうが！」

「あっ！ ピヨった！」

「ふざけんな！ もう二落ちしてるんだから後がねえぞ！」

「そう思うんなら粉塵でも……あ」

「くそ！ 明久の所為で失敗じゃねえか！」

「雄二がサポートしないから悪いんだろ！」

「何だと！自分の失敗を人に押しつけるのか！」

「その言葉そっくり返してやる！」

どちらにしても僕がほとんどダメージあたえたんだが。

明久と雄二がテーブルの上のコーラを取る。

「何だ、やるのか？」

「いつかは決着をつける必要があると思っていたからね」

ちなみに明久に良いゲームの選び方や、中古の買い方などを教えた
ら、だいぶ生活が潤ってきたため、飲み物程度なら常備してあるの
だ。

両方ともコーラのボトルを構え、機をうかがう。

台所の水滴が落ちるとともに勝負にでた。

シャカシャカシャカシャカシャカ（ペットボトルを振る音）

ブシャアアアアアアアア（コーラを噴出する音）

バタバタバタバタ（コーラが目に入った明久と雄二がのたうち回る
音）

「「目がっ！目がああああっ！」」

こいつらの頭はまるでゴミのようだ。

「全く、こんなことでふざけてないで。雄二はそのままだと気持ち悪いだろうから、先にシャワー浴びてきな」

「ああ、そうする」

「明久はまずは雑巾で床を拭く」

「はい」

これ以上変な戦いを続けても意味ないので、とつとと処理をする。

「あ、そういえば―――お金払い忘れてたから今日はお湯が出ないだった」

『ほわああーっ!?!?』

ガチャツ　ズカズカ

「……先に言えやコラ」

「ごめんごめん。言い忘れてたよ。えっとね、心臓に近い位置に――」

「冷水シャワーの使い方は説明しなくていいから」

「え? でも僕の家のお湯が出ないという事実は変わらないし……」

「仕方ない。明久、外に出るぞ」

「外? あ、そっか。雄二の家に行くんだね」

「それでもいいんだけどな。どうせならシャワーだけじゃなくてプールもあるところに行こうぜ」

「プールもあるところ？」

スパリゾートはちょっと遠いから違うし……。

「ああ。シャワーもプールもあって、ここから近くて、尚且つ金もかからないところがあるだろうが」

シャワーもプールもあって、金がかからないといえば学校だね。

「オッケー。すぐに用意するよ。雄二は水着どうするの？」

「僕はこのまま帰るね」

「俺はボクサーパンツで泳ぐさ。水着と対して変わらないだろ」

「りょーかい。それじゃ博人、また学校で」

「ってことがあって、おかげで散々な週末だったよ」

週明けの教室で、明久がプールで西村先生に捕まってプール掃除を

任されたことについて愚痴っていた。

「そうじゃったのか。それは災難じゃたのう……」

秀吉は氣遣うような表情を浮かべているが、明久達のあれは自業自得だ。

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はあ……」

「まあそう言うな。褒美ってほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？ そうなの？」

「ああ。だから秀吉とムツツリーニと博人も今週末にプールに来ないか？ ただし、ムツツリーニと博人には掃除を手伝ってもらうけどな」

「……………」

「うん、別に構わないよ」

ムツツリーニは掃除ということで返答に悩んだようだが、僕はプール掃除程度は問題ないので軽々しく受ける。

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「あ、雄二。メーブルと行平も呼んで良い？」

「もちろんだ」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

どうやら女子が来るということでムッツリーニは引き受けるらしい。

「うむ、そうじゃな。貸切のプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじゃろうし、相伴させてもらおうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？結構大変だと思うけど、いいの？」

「うむ。お安い御用じゃ」

秀吉も参加してメンバーが結構増えたので、プール掃除も結構楽になるだろう。

「んじゃ、あとは向こうの二人だな。おーい、姫路、島田」

「どうしたの坂本？何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

「二人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「「え……？」」

プール、という単語に二人は一瞬反応した。メープルに話したときはどんな反応されるだろう。

「あ、さては二人とも予定があったりする？」

そういうことではないぞ、明久。

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？ プールっていうと、やっぱり水着だし……」

「そ、そうですよね。水着ですよ……。その、えっと……」

「まあ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……。一つ言っておくと、秀吉は来るぞ、水着姿を明久に見せに、な」

「ひ、卑怯よ木下！ 自分は自信があるからって！」

それにしても水着、かあ……

メープルはどんなのだろうな？

べ、別に気になってなんかないんだからねっ！

ツンデレっぽく言ったのと、メープルの水着が気になっていないということで二重の意味で冗談だ。

ま、水着は当日になればわかる。

「とにかく全員オツケーのようだな。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

そんな雄二の締め言葉と同時に、西村先生が教室に入ってきた。

僕とプールと水着姿？

僕とプールと水着姿？

「おはよー。絶好プール日和だね」

やってきた週末。

抜けるような青空の下、校門前で待っている僕たちに明久が手を挙げて挨拶してきた。

「おはようじゃ明久。良い天気じゃな」

「おはようございます明久君。今日は良い一日になりそうですね」

「雲量0、快晴だね」

「おはよっすー」

「今日は良い天気で良かったですね」

なにやら明久が拳を握って喜んでいるが、放っておこう。

「ムツツリーニ。おはーーー」

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

明久はムツツリーニ声をかけようとしていたが、やめた方が良さ
だろう。

なにせここまで鬼気せまっているのだから。

「ムツツリーニは鼻血で倒れないように輸血の準備をしてあるんだ
って」

「最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」

準備といえば、メープルは新しい水着を買ったらしい。

買い物についていこうかと訪ねたが、秘密にしたいからと断られた。

……後ほど更衣室に連れ込んだけばよかったなどと言っていたの
は気がかりだったが。

まあ、家を出る時から気合いを入れていたので、楽しみだ。

その後島田さんと島田妹が現れ、着替えに移った。

――そして十分後――

「ハークッ！」

ドンと後ろから軽い衝撃とともにメープルがやってきた。

……背中に柔らかな感触がする。

「メ、メープル！ちよつと離れ――」

最後まで言葉を継げなかった。

紫を基調としたビキニ。布の面積もどちらかと言えば小さめだ。メーブルの整ったスタイルと合って、見惚れてしまった。

「見惚れちゃったすか？ハク」

「……………うん。とっても良く似合っているよ」

メーブルがニヤニヤしているので、素直に言うことでペースをこっちに持ってこよう。

「……………ふえ？」

こうかはばつぐんだ。

「今までも何回か見てきたけど、今回のが一番良いと思うよ」

「…………ハク……………ありがとう♪」

すっかり赤くなっただけ、流石はメーブルといったところで、自分の水着姿をさらに有効活用するため、またくつついてきた。

……………わかっていた……………わかっていたんだよ。この程度じゃメーブルのペースを完全に崩すことはできないって！

「さあさあ今日のプール掃除の監督という建前でやってきた杉本先生だよ♪」

何故か秋音姉も来ていた。

「おや、なかなか似合っていますよ。とても可愛らしいです」

「にやははー、ありがとー」

行平がなかなかうまく褒める。

自然な流れで褒める、これは重要かもしれない。

抱きつかれたままメープルと一緒に雑談していたら、（お二人とも見せつけてるんですか？by行平）はて？何のことだろう。残りの人も来て、明久がトチくるったり、ムツツリーニが死んだり、雄二の目が大ダメージを受けたり色々あったが、今は落ち着いてプールを楽しんでいる。

すると、いきなり足を掴まれて、水中に引きずりこまれそうになった。

少し抵抗すると、あっさり諦めてくれたので、水中から足をつかんだ人物を引き上げる。

「何やってんの？メープル？」

「明久君が『水中鬼』ってゲームを提案したんだけど、水中に引きずり込んで、人工呼吸をしたら勝ちなんだって」

「僕は溺れてないから人工呼吸は必要ないよ。残念でした」

するとメープルは口をニヤリと歪めて、

「おや、私の目には今にも助けが必要ないように見えるけど？」

と言った。

なるほど。事実はどうでも良いから、とにかくキスをするということ

とか。

ならばー

たたかう バッグ

ポケ○ン ↓にげる

逃げるしかない。

「逃がさないっすよー」

水の中をクロールで進む。

……プールから上がらなきゃ逃げ場くない？

その後僕の心配通り、プールサイドに手をかけたところでタイムロスして、やられてしまった。

何がとはさっき説明した通りだ。

そして、いつの間にか工藤さんが来ていたが、特に問題ないだろう。

そんなことより重要なのはー

「ーー実は、今朝作ったワッフルが三つ」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（明久の声）

「「ガチンコ水泳対決ーっ！！」」（明久と雄二の声）

「「イエーッ！」」（秀吉とムッツリーニの合いの手）

この殺人ワッフルだ。

でもまあ、水泳対決なら丁度良い。おそらく生き残れるはずだ。

「明久、ルール説明だ！」

「オッケー！ルールはとっても簡単。ここのプールを往復、速くゴールしたひとの勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

そう、普通の水泳勝負だ。三位以内に入らねば死ぬということのをぞけば。

「ハク！がんばるっす！（大丈夫、いざとなったら、うまくフォロ―入れるから）」

「うん、がんばるよ（お願い）」

建前を貼り付けてのアイコンタクト。長年一緒にいたので、意志の疎通は楽々できる。

しかし、重要なのは明久と雄二の動きだ。妨害にでるか、本気で勝負してくるか。

「位置についてー！ーよい、スタートっ！」

「「くたばれええっ！！」」

工藤さんの合図と同時に明久と雄二はお互い全力で跳び蹴りを放っていた。

「くそっ！ やっぱり雄二も同じことを考えていたね！？」

どうやら僕たちを妨害するのは難しいので、残る一枠に入るため他のヤツを蹴落とすつもりのようなのだ。

それなら好都合。とつととゴールするだけだ。

ゴールまであと数メートルというところで明久たちがプールに入ってきたが、楽々ゴールする。隣を見ると行平も同着だった。

プールから上がって水を見ると、真っ赤に染まっていた。

どうやら秀吉の水着がとれたのが原因で、ムッツリーニが鼻血を出したらしい。

……流石にこの量は死ぬんじゃないか？

「き、木下っ！ とにかく胸を隠しなさい！ 土屋の血が止まらないから！」

「いいイヤじゃっ！ ワシは男なのじゃ！ 胸を隠す必要はないのじゃ！」

「木下君、我が儘言っちゃダメです！ 土屋君が死んでいます！」

「……愛子。救急車の手配、頼める？」

「はい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたと、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

というか今気づいたんだけど秋音姉がいない。おそらく処理が面倒だから逃げたんだろう。

僕も今すぐにも逃げ出したい。

結局ムツリーニは懸命な手当でなんとか生き延びた。

……ああ、水上ござ走りやりたかったなあ……
こういう機会じゃないとできないだろうし。

僕とバイトと頼まれ事

僕とバイトと頼まれ事

『スマン！助けてくれ！』

電話で第一声がそれでもわかるわけではない。

「いきなりどうしたの？海渡」

『いや、実は俺喫茶店ラ・ペデイスの副店長やってるんだよ』

「前にも聞いたね」

確か幼なじみの清水美春さんの父親の手伝いをしているうちに任せられたらしい。

『で、店長が奥さんと娘さんに逃げられた』

「清水さんとそのお母さん？」

『ああ、理由は聞かないでくれ。とにかく、そのショックで店長がいかれてバイトの人がいなくなっちゃったんだ』

「僕に手伝ってほしいと？」

『ああ。できれば行平も頼む』

確かに行平は接客に向いていそうだ。

「わかった。僕は問題ないけど、行平には確認とってみる」

『助かる』

「じゃあ、また後ほど」

行平に聞いたところ問題ないそうで、海渡からバイトの詳細を聞き、土曜日の開店一時間前に『ラ・ペデイス』に集合した。

「どうして博人がここにいるの？」

他にもバイトの人が来るとは聞かされていたが、それが明久達だったようだ。

「僕は海渡に頼まれたんだよ。明久達はバイトだよね」

「さて、皆集まったな。今日は店長が美春達に逃げられたショックでグロッキーだから、俺が仕切ることになる」

そう言って持ってきた制服を渡してくる。

……秀吉には女子用のヤツだ。

「性別が合わないのじゃが」

「ここにいるのは全員男子だ。華がなくなるから最も適した木下が女装してくれ」

どうやら海渡は秀吉をきちんと男子と認識しているようだ。最近性別を些細なこととして捉えているヤツが多いから少しほっとした。

「そうじゃな、ここにいるのは『全員男子』じゃから仕方あるまい」
きちんと男子として認識されたのが嬉しいのか、上機嫌で了解してくれた。

ロッカー室はあまり広くないので、まず僕と行平から着替えた。

「博人と行平。お前たちは少しキツイと思うが、ホールと厨房を掛け持ちしてもらう。……奴らは何するかわからないからな」

最後の一言には激しく同感だ。

全員着替え終わり、再集合する。

「ホールは吉井と木下。厨房は俺と坂本と土屋が担当する。博人と行平は最初は厨房で作り方を覚えてくれ。その後臨機応変に対応してくれ。今日仕切ってるのは俺だが、立派な仕事だ。気を引き締めてやってくれ」

「「「了解!」「」」」

現在僕は厨房、行平はホールだ。

『エスプレッソ1、レモンティー1、シャーベット2じゃ』

「わかったよ。あ、三番にこれ持ってって」

客が結構来ていて、休む暇なく料理を作り、渡していく。

『ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ、ホットケーキ、モンブランを一つずつと、頑張つてを三つ』

「なんでお前は客に励まされているんだ？慣れないだろうけど落ち着いていこうよ」

そして、時間が流れ、

ーカーランコロン

「「いらっしやいませー」」

現在ウェイター中の僕は入り口付近で明久と一緒に挨拶した。

「ハク、遊びにきたっす」

「こんにちは、明久君」

「メープルいらっしやーい」

「え？姫路さん？」

やってきたのは、メープルと姫路さん、続いて島田さんと霧島さんだ。

……霧島さんはもの凄い勢いで厨房に向かっていったが。

「やってるわね、アキ。へえ、結構似合ってるじゃない」

「あれ？美波まで？」

明久が思わぬ来客にボーっとしてるが、仕事中だということを忘れてもらっちゃ困る。

「何名様ですか？」

「六人っす。一人はここにいて、後一人は遅れてくるっす」

メープルが体をずらして影から秋音姉が出てきた。

「やつほく。しっかりやってるね？」

この人士曜日に仕事は無いのだろうか？

『……雄二。妻への隠し事は浮気の始まり』

『なんだ！？いるはずのない翔子の声が聞こえるぞ！？呪いか！？』

『霧島、厨房は関係者以外立ち入り禁止だ』

『……でも私は雄二の……』

『だから坂本、お前ちょっと休憩。早めに話付けてこい』

『は？イヤイヤイヤイヤ俺はまだ仕事か……』

雄二を連れて霧島さんが戻ってきた。海渡め、なんて良い仕事をす

るんだ。

「ご注文はお決まりですか？」

「うーん……何がいいでしょうか？」

「……どれも美味しそう」

あの人達の接客は明久に任せて、他の客を捌くでしょう。

数分後――

「な、なんだ！？ どうして翔子がいきなり戦闘態勢になっているんだ！？」

「明久君！ やっぱり美波ちゃんとデートしたんですね！？」

ゴキーンッ

「秀吉、ちょっといいかしら？」

なにこのカオス？

こいつらの関係者だと思われたくないのか、メーブルと秋音姉は離れた席でゆっくり談笑していた。

というかこの状況をどうおさめろと？

無理難題に頭を悩ませていると、

「お前たちはなにをやっているんだ！！ここはふざける場所じゃない！マナーが守れないなら出ていけ！」

だいぶ怒った様子の海渡が出てきた。

さすが副店長。全員静かになったよ。

「お客様、大変失礼致しました。どうぞお気になさらずごゆっくりとー」

海渡が客に頭を下げ、フォローを入れたところで、

ーカランコロン

店のドアが開いた。

「どう、海渡？お父さんは反省してた？」

「ああ、だいぶショックを受けてたぞ」

「そう、それならそろそろ戻りましょう」

「それよりも美春。手伝ってくれないか？」

「ええ、わかりました」

「OK。仕切り直しだ」

その後もバイトはつついて、結構うまく仕事ができるようになった。

明久達は給料が少し減額されたが、まあ妥当だろう。

それにしても、今日は変なことが起きなくて良かったなあ……………

私と彼と主導権と――

私と彼と主導権と――

皆さん今日は。佐藤楓、渾名はメープルです。

今回は、私の視点でいきます。

今回の主役ですから。サブタイ通り。

さて、今回は私たちの日常を紹介する話です。

それでは、開始です。

「ハク、起きて〜」

定番イベント、幼なじみに起こされる……はいいんだけど現在六時。
正確には五時五九分。

ハクは六時になると起き出すので、それまでに起こさないとイベン

トにはならないのだ。

まあ、七伏家に泊まっていたから、それほど難しくはなかったわ。

それにしてもハクの寝顔は可愛いなあ〜♪

「うん？朝なの？」

全く眠そうでなく目を開けてすぐに起きあがってくる。

隣を見るとユキも起きてきた。

六時になると起き出すとかこの家の人間はやっぱりどこかおかしい。

「おはよう、メープル」

「おはよう♪」

私の恋人さんはもう覚醒して、さっきの可愛らしい顔より少し凛々しくなった。

……これだけ格好良くて可愛いんだけど自己紹介で

『好きな昆虫はルリタテハ、好きな爬虫類はサイドワインダー、好きな鳥類はハシブトガラス、好きな両生類はアベコベガエル、好きな魚類はヤマメ、好きな軟体動物はタガヤサンミナシです！』

と言ったら台無しだと思う。

私はそれも含めて愛しているけど。

「それじゃ、僕はちよつと外行くけどメーブルも来る？」

ハクの朝の日課はランニングがてら昆虫採集だ。

「もちろん。着替えるからちよつと待っててね。あ、覗いても良いよ♪」

ハクは顔を紅く染めて着替えを取りに行ってしまった。

ああ……こういうところも可愛いな。

ランニングも終わり、休日なのでハクと一緒にまったりしていると、良いことを思いついた。

本を読むのに集中していて、周りあまりよく見れていないハクに気配を消して近づく。

たとえば集中していても、気配を消さないとすぐに気づかれるのがめんどくさい。

「…………ふーっ」

「ひゃうっ！」

そつと耳に息を吹きかけると、可愛らしい声をあげて反応してくれた。

部屋の隅を見ると、ユキがキチンとビデオ撮影してくれていた。

グッジョブ！流石わかってるね。

「ななな、何！？いきなり！」

「ねえねえ、ゲームしない？」

「うん、いいよ。何やる？」

「えっちいことをやろう」

「却下ああああ！！」

「冗談だって……。44ダブルで勝負しない？」

44ダブル……。四対四のダブルバトル。ハクが一番得意なルールだ。

ハクの戦法のスピードと火力の両立をしたトリパはかなりやりづらい。

耐久も結構あるし。

ゲーム名はあえて出さない。

「OK。それじゃ、始めよう」

よしよし、うまくのってきた。

「ハクが一体倒すごとに私が一枚脱いで、私が一枚倒すごとに一枚

脱ぐね♪」

「…………冗談は置いて、何でそんなに僕を誘惑しようとするの？ そんなことしなくても僕は…………その…………メーブルのこと、ちゃんと好きだよ」

「それはわかってるけど…………ハクは魅力的だから、どうなるかわからないから。だから、私から逃げられないようにしないと」

すると、ハクは私を引き寄せてキスをしてきた。

「もうメーブルから、逃げられないよ。本当に好きだし。……………
……………ってああああああ！！死にそう！何これ！恥ずか死ぬ！」

格好いいセリフも最後で台無しだ。

「それじゃ、これからはみんなに見せつけて、ハクが私を愛しているってことを知ってもらわないとね♪」

「いや、外では止めてほしいんだけど……………」

「イヤ」

「……………はあ……………」

ハクは主導権を握ろうと頑張っているけど、こんなんじゃないつまでたっても私の尻に敷かれたままだよ？

でも、本当に今は楽しいなあ。

願わくば、ハクといつまでも共にいることを。

少女は昆虫少年と共に歩み、彼を支え、愛し、抱擁する。
そして共に笑いあう。

私と彼と主導権と――（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

僕と紳士と弱点と――

僕と紳士と弱点と――

「行平！お願いがあるんだ！」

ある休日、僕は行平に泣きついていた。

「ほう、なんででしょう？」

「僕ってさ、いつもいつもメーブルに主導権握られているよね？」

「ええ、そうですね」

アッサリ即答された。自分から問いかけたとはいえ、なんか悔しい。

「だから、少しはなんとかしたいということだよ」

「ふむ、いつかはそんなことを聞かれるんじゃないかと思ひまして、回答は用意しておきました」

おおっ！さすがマイブラザー。気が利いている。

「私の回答としては――」

無理です。あきらめましょう」

「……………は？」

『無理です。あきらめましょう』ですと？

「行平にはマル秘弱点帳があるんでしょ？」

「ええ、確かにメールについての交渉材料はありますね。しかし、脅迫材料は一つありません」

「じゃあ、その交渉材料で良いから！」

「メールに対しての交渉材料の内9割は博人を犠牲とするもので、残りは過去の失敗程度で、有力といえるカードではありません」

僕を犠牲に交渉するってどういうことだ。

「それに対して、博人への脅迫材料はメールとのキス画像が13枚。同じくメールとのキス動画が2本。黒歴史が一つ。メールにばらしたく無いような会話の録音データが一つ。どちらが不利か一目瞭然ですね」

怖い、怖いよこの人！

「まあ、もしもメールに対しての良い材料があったとします。それを突きつけたあと、どうなると思います？ 私の予想はお仕置きと称して色々なことをしてくると思うのですが」

『こんなことを調べちゃうなんて……悪い子にはお仕置きだね♪』
と言いながら迫ってくるメールが鮮明に想像できる。

マル秘弱点帳が最後の頼みの綱だったのに……

「しかし、まあなんとかする方法がないとは言いませんよ？」

「そんな言い方をするってことはなんにか裏があるんでしょう？」

それもおそらくモロに僕が犠牲になるヤツが。

「別にそんなに難しいことはありませんよ。ただ博人が積極的に出て、襲うぐらいの勢いで行けばいいんですよ？」

「できるかぁ！」

茶目っ気たっぷりに爆弾投下した行平に、せめてもの抵抗として大きな音を立ててドアを閉めて逃げ出した。

『クククッ。少なからず今の言葉を気にするでしょうから、どんな展開になるか楽しみですねぇ』

僕が出て行った行平の部屋には、そんな呟きがあったそうな。

「お邪魔しまっすー」

軽快な声と共にメープルが家にやってきた。

「いらっしゃい、メープル」

「お出迎えご苦労様、旦那さん♪」

最初っからメープルペースだ………

「入籍はしていない」

「そうだね。入籍予定だからね」

『ただ博人が積極的に出て、襲うぐらいの勢いで行けばいいんですよ』

「おりよりよ？反応がないね？」

積極的に………か………

「あれ？本当にどうしたの？」

襲う……はなしとしても、少しぐらいは効果あるかもしれない。

「おい、聞いてー！ー」

僕の顔を覗き込むようにしていたメーブルの唇を奪う。

そのまま抱き寄せて、舌を入れる。

ヤバイ恥ずかしいでしょう嫌われないかな大丈夫かなこのあとどうすればうわああああ！！！！

だいぶ一人で悩んでいると、いつの間にかソファアの上にメーブルを押し倒しているような格好になっていた。

すぐさま離れて、土下座する。

「自分調子くれてました！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

ガシッ

額を床にすり付けていると、メーブルにしっかりと掴まれた。

「どうしてそこでやめちゃうの？期待してたのに……！もう怒ったからね！」

そのまま襟首を掴まれて寝室に連行される。

「今日は全面的にハクが悪いんだよ？しっかり代償は払ってね？身

体で」

結論、積極的に出でもやっぱ無理。おとなしく尻に敷かれるしかない。

「まさかここまでうまくいくとは思いませんでしたよ。それにしても今日は運が良いですね。まさか博人がメーブルを押し倒す動画を入手できるなんて」

七伏行平。紳士で名の通っている彼はサディスト成分も含んでいる。

そんな彼のいじり相手は主^{おもちゃ}に博人。

そして、彼の持つ弱点帳。

そこには文月学園に在籍するほとんどの人間の弱みがかかわれているらしい。

少々Sを含んだ紳士は、過去も今日も未来も昆虫少年《半身》と、最高の相棒であり続けるため、日々に刺激を求める。

僕と従姉と義姉さん?とー

僕と従姉とお義姉さん?とー

「さて、今回は新しい召喚実験、やってみよう♪」

「「「おー!」」」

『試験召喚実験者』として、召喚システムの実験室に呼ばれ、一緒に参加するメープルたちとノリノリで無駄にテンションをあげていく。

「テーマは『召喚獣の装備』。今から召喚獣の装備をランダムで変更するから、それで操作してね」

「「「試験召喚」」」

キーワードに合わせて幾何学模様が浮かぶ。

現れた召喚獣はいつも通りの武器を持っていた。

「変更するよう!」

言葉と同時に召喚獣が光に包まれる。

そして、僕の装備は皮の鎧と、短剣になっていた。

メープルは鎖鎌、行平は投げナイフに変わっていた。

動作を確認してみても、特に異常はなく、動かしやすかった。

メープル達も同じような様子だ。

「次いくよ！」

また召喚獣が光に包まれる。

今度の武器はジャージとアイスピックだった。

今度はメープルと行平は、蛇腹剣とダーツだ。

「ふむ……やっぱりある程度召喚者の特徴が出るみたいだね」

確かに僕の装備は、機動性が高いもの、メープルはテクニク、行平は遠距離系の武器だった。

「うん、今日はここまでデータ取れば良いかな。また後で実験して、回数を重ねてみよう」

というわけで、今日は解散となった。

今日はメープルの両親の帰宅が遅くなるので、メープルも交えての

食卓となった。

そこまでは良い。

ただ、もったいないからという理由で、秋音姉が貰い物の酒を飲んでしまったのを止められなかったのが間違いだった。

「ふっふっふ♪良いではないか良いではないか」

「ちよっ…………秋音さん!？」

秋音姉が酔っ払ってしまい、手がつけられなくなってしまった。

「あっ……………ダメだって…………!」

メイプルが胸を揉まれて、身動きがとれなくなっている。

……………ゴメン、僕を標的にされたくないから、そのまま置いて。

「彼氏さんはちゃんと助けないとだめだぞ」

……………なにっ!？

高速移動する秋音姉に襟を掴まれて、引っ張られる。
なんて力だ!

力なく地面に座り込んでいるメイプルの方に引っ張られる。

……………まずいっ! なんとかスピードを殺して、激突しないようにせねば!

メーブルに覆い被さるような形で床に手をついてしまったが、なんとかセーフリーー

ガチャン

左手を見ると、床についた手とメーブルの手が、手錠で繋がっていた。

「はい？」

ガチャン

……………右手も繋がれた。

もういや……………

「二人仲良く、お風呂にトイレ♪頑張ってね！」

流石に両手塞がれたら無理でしょ？

っと思ったら、テーブルの上に鍵が一つだけ置いてあった。

まずは両手封じて無力化してから、後でイベントを楽しむってことか……………

「そろそろ落ち着いてください、秋音さん」

「行君……………だぁゝいすき♪」

「ありがとうございます」

秋音姉の告白を難なくスルー。救世主だ！その調子で鍵を取り返してくれ。

「断ります」

まだ口に出してないんだが……………

「むう、私は真剣なんだよ！ねえ、キスしたらわかってくれる？」

「わかりました。いいでしょう」

行平の答えを聞いて、秋音姉がゆっくり顔を近づける。

あと数センチ、といったところで行平は手刀で秋音姉の意識を刈り取っていた。

「すみません……………その思いに応えるのは、あと二年待ってください」

二年後……………つまり卒業後か。

「行平、鍵探して」

「もちろん断ります♪」

このくそがああああっ！……！

教師は紳士と約束をする。紳士が彼女の思いに応えられる時がくるまで、彼らの関係は今のまま。

第三十二問

第三十二問

新学年になってから2ヶ月がたち、日の沈む時刻が段々遅くなっている今日この頃。

僕たちはいつも通り三人で登校していた。

「明日から学力強化合宿だね、ハク」

「うん。準備は昨日のうちに終わらせたから、万全だよ」

明日からは学力強化合宿。四泊五日で卯月高原にいくのだ。

「四泊五日なんて、修学旅行みたいで面白そうですね」

「僕としてはFクラスに不安があるんだけど」

理由…ヤツらは何をしでかすかわからないから。

「それも含めて面白そうではありませんか？」

はつきり言ってそれには共感できない。

少々の不安もしくは多少の不安または微量の不安でもなく現実から目を逸らせずに実は結構大きく的中しそうだと思えた不安を抱え、その元凶であるFクラスの教室に向かっていった。

教室のドアを開けると、明久、雄二、ムッツリーニのメンバーが額を寄せていた。

ここで選択肢発生。

？危険なので見なかったことにして席でおとなしくしている。
？危険なので少しでも関わって改善できるように声をかける。

……？だな。

「三人とも何やってんの？」

「博人か……丁度良い。話がある」

「あ、僕のほうもお願い」

雄二と明久が事情説明中――

各相談を一行ずつでまとめると、

雄二『結婚が目前に迫っている』

明久『変態として周囲に認識されそう』

詳しく言うと、

雄二『プロポーズ（偽）が録音されていて、霧島さんに結婚の話を進められそう』

明久『清涼祭のときのメイド服に女装した時の写真が盗撮されてい

て、脅迫されている。無視したら写真を公表』

……………若干今更感があるのは言わないでおこう。

「明久は盗撮写真の犯人、雄二は盗聴の犯人を探せばいいんだね」

「ああ、頼む」

まあ、このぐらいの頼みならいいだろう。

「わかったよ。力を尽くしてみる」

話が終わって丁度良いところに、西村先生がやってきた。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだが」

イヤイヤ。ランプ系統は必須でしょうよ。

ちなみにランプの絵柄は四季を表していて、数字を全て足していくと364。これにジョーカーの一枚を足して365で一年を表しているらしい。2枚目のジョーカーは閏年を表すのだそうだ。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

しおりの集合場所と時間の書かれているページを探す。

どれどれ……Aクラスなんかだいぶ豪華だな。

Fクラスは………

「いいいいあ、他のクラスと違って我々Fクラスは―――現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ!?!?』』』

さすがにこれはあんまりだと思う。

第三十三問

第三十三問

強化合宿一日目の日誌

七伏博人の日誌

『電車から降り、感じた気温が低いことから、標高が高いことが感じられた。合宿所の辺りには木がけっこうあり、チラツとだが、キタテハが見えた』

教師のコメント

博人君が普段どんなことを考えているかわかりました。

七伏行平の日誌

『行きのバスの中、メープルが博人について熱弁をふるっていました。微笑ましい光景でした。最近弄るネタが少なくなってきたので、今回の合宿は良い機会になりそうです』

教師のコメント

いつも紳士的な行平君ですが、意外な一面を見ました。

佐藤楓の日誌

『バスの中、優子と愛子にハクについて話すのに熱中してしまった。行平がいつも以上にニコニコしていたけど、握られる弱みもないし、からかわれても開き直れるので問題なしかな』

教師のコメント

彼との仲が良好なのは良いことですが、節度を守ってお付き合いしてください。

電車に揺られ、一時間程。

「あと二時間くらいはこのままですね」

姫路さんが携帯で時刻表を確認したようだ。

僕の後ろの席に座っている明久はやることなく暇そうだが、僕はまったく問題ない。

「異議あり！」

これだけ聞けば何をしているかわかりだろう。

どんな状況でも逆転させる裁判だ。

これでプレイは十五週目だ。現在は目を瞑ってでもクリアできる。

ストーリーを楽しみながらクリアすると、時刻は一時十五分を指していた。

「あ、お昼ですね。それならー」

と、姫路さんが鞆の中から何かを取り出そうとしていた。嫌な予感がする。

「実は、お弁当を作ってきたんです。良かったら……」

まずい、目の前に化学兵器が出現した。

「姫路。悪いが俺も自分で作ってきたんだ」

「すまぬ。ワシも自分で用意してしまったの」

「……調達済み」

「僕も、お弁当があるんだ」

皆自衛策は万全だ。

「そういうわけで、明久にでもご馳走してやってくれ」

雄二が勝ち誇った顔をしているが、昔に比べ今の明久の財力はまともになっているから明久も何か用意してあるだろう。

「ごめん。僕も実はこうして惣菜パンを」

「おっと、手が滑った（パシッ）」

「……足が滑った（グシャッ）」

「ああっ！パン！僕のパン！」

雄二が叩き落としてムツツリーニが踏み潰した。
びっくりするほどの連携プレーだ。

「あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末にー」

「ーしてはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させて
もらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらってくれ」

「「……………！！」（ガンのくれ合い）」

「おっと、ゴメン雄二。僕も手がー」

「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな」

「「……………」（メンチの切り合い）」

さすがに現在は明久に分が悪い。助け舟をだそう。

「せっかくだからその四人で分け合えばいいと思うよ」

明久から『グッジョブ』というアイコンタクトが、雄二からは『俺
を殺す気か！？』というアイコンタクトが返ってきた。

うまく雄二を巻き込めたと思ったが、結果的に明久が姫路さんの弁

当を食べて生死の境をさまようことになった。

Aクラスのバスの中く

『せっかくだからハクと一緒に電車で行きたかったっす』

『アタシ達はAクラスなんだからきちんと決まりは守らなきゃだめよ』

『そこに守らなきゃいけない規則なんてあるなら、そんな幻想はブチ殺すべきっす』

『……はあ。それにしても博人君も大変ね。Fクラスで一年間過ごすなんて。Fクラスなんてバカの集まりじゃない』

『ボクは楽しくっていいとおもうけどね』

『愛子の言うとおり、結構楽しいクラスっすよ。それにハクはFクラスを嫌だなんて思っていないっすよ』

『でも勉強のレベルがー』

『《机の上で学べることもあれば、僕のように昆虫と触れ合うことで学べることもある》ハクが言ったことっす。だからハクは今Fクラスでバカなことをやって学べることを吸収しているっす。ハクにとっては勉強というのは机の上だけじゃないっす。いつでも勉強な

んすよ。だからクラスがどうかは関係ないっす。そりゃ、確かに一緒の方が嬉しいけど……』

『そこまでアツアツだと、もうあんなことからこんなことまで経験ずみなのかな？』

『いや、まだあんまりー』

『待ちなさい楓。まだあんまりってことは少しならあるってことよね？』

『……………そうだったのはまだ二回っす』

『えー！？どんなことやったの？』

『ヒミツっす』

『えー。教えてよー』

『この話はこれで終わりっす。変わりにハクの苦手な話をするっす』

『博人の苦手な物なんて想像しにくいわね』

『虫とか蛇が大好きって言ってたもんね』

『まずは苦い物っす。本人曰わく『苦味というのは本来有毒物質を感知するための味覚なんだ。だからそれを嫌うのは正当だ！』だそうっす』

『科学のないいわけだね』

『次に犬が嫌いというか苦手っす』

『へえ？どうして？』

『それは『あんな凶暴な肉食獣どじゃれあえるヤツの気が知れない』
って言ってたっす。ついうっかりすると蹴り飛ばしそうになるとい
ってたっすね』

ふむ、新情報が聞こえることはありませんでしたね。

面白い話は終わってしまいましたので、ゆっくり景色を楽しむとしまし
ましょう。

第三十四問

第三十四問

旅館に到着――は良いのだが、明久がかえってこない。

現在A E D（自動体外式除細動器）を使って蘇生を試みている。

「反応があつたぞ！」

「よし、そのまま続けて！」

その後も懸命な処置を続け、なんとか明久の蘇生に成功した。

「……昨日、犯人が使つたと思われる道具の痕跡を見つけた」

実際の死から逃れることができたので、今は社会的な死について会議中だ。連続で死の危険について考えるなんてこの学園はハッキリ言っただうかしてる。

「……手口や使用経路から、明久と雄二の件は同一人物の犯行と断定できる」

「そんなことをする人はそうはいないから、断定してもよさそうだね」

まあ、この学年に二人もいる時点でおかしいけど。

「それで、その犯人は誰だったの？」

「……………（プルプル）」

明久が訪ねるが、ムッツリーニは首を横に振った。さすがにこの短期間の調査では犯人まで割り出せなかったのだろう。

「あ、やっぱりまだ犯人はわからないの？」

「……………すまない」

「僕の方もこれだけの情報じゃ、犯人予測は難しいかな」

「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」

「……………『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかった」

「君は一体何を調べたんだ」

明久の意見に同感だ。普通知り合いでもお尻の火傷の痕の有無なんて知らない。

「……………校内に網を張った」

そう告げながらムッツリーニが取り出したのは小型録音機。これで盗聴を行ったのだろう。

ーピッ 《ーらっしゃい》

スイッチを押すとノイズ混じりの声が聞こえてきた。

「随分と音が悪いね」

「校内すべてを網羅したのなら仕方ないだろう」

「音質や精度にこだわる余裕もないしね」

辛うじて女子の声だとわかるが、人物の特定はできない。

《……雄二のプロポーズを、もう一つお願い》

これはおそらく霧島さんだ。

独特の話し方とセリフの内容から判断できる。

「しょ、翔子……！アイツ、もう動いていたのか……！」

「よっぽど早く手に入れたんだね」

《毎度。二度目だから安くするよ》

《……値段はどうでもいいから、早く》

《流石は太っ腹だね。それじゃあ明日ーと言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから引き渡しは来週の月曜で》

《……わかった。我慢する》

「あ、危ねえ……。強化合宿があって助かった……」

「タイムリミットが月曜まで延びたね」

実際は土日に行動ができないから、後四日だ。

「……………それで、こっちが犯人特定のヒント」

《――相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮ってるのがバレたら酷い目に遭うんじゃないですか？》

《ここだけの話、前に一度母親にバレてね》

《大丈夫だったんですか？》

《文字通りお灸を据えられたらよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

《それはまた……》

《おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？》

それ以降も他愛もない商談が続いた。

「……わかったのはこれだけ」

「なるほど。それでお尻の火傷の痕ってことか」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居がかったけど女子なのは間違いないだろうね」

「……確かに火傷の痕は有益な情報だけどさ、確かめる手段がないよね？ 赤外線でも無理だろうし……」

僕の言葉に対して明久と雄二は真剣に女子のお尻を見る方法を考えていた。

「おぬしら、さっきから何の話をしておるのじゃ？」

「秀吉、実はねー（以下略）」

秀吉はおそらく事情を話せば協力してくれるだろう。
使える駒がふえるのは良いことだ。

「そうじゃったのか。それにしても、尻に火傷とは……」

「そうだ！ もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。何故にワシが女子風呂に入るこちが前提になっておるのじゃ？」

秀吉のツツコミはもつともだ。

「それは無理だ、明久」

「そもそも秀吉は男だし、しおりの三ページを見てみな」

・Fクラス木下秀吉：20…00～21…00 個室風呂？

「…くそっ！ これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだよ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ!？」

……おや、何か大勢の足音がこちらに向かっている。

足音を消す気配もないし、危なくはないだろう。

しかし、嫌な予感がするので布団の入っている押し入れに隠れる。

ーードバン!

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい!」

第三十四問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第三十五問

第三十五問

何が起ったのかと隙間から覗いてみると、女子の大群が乗り込んできていた。

「な、何事じゃ!？」

「木下はこっちへ! そっちのバカ三人は抵抗をやめなさい!」

どうやら明久たちは咄嗟の判断で窓から脱出しようとしたようだ。

この状況なら、誰かを生け贄にして隠れるのが一番効果が高いが、明久と雄二はピンポイントで狙われるから、窓から脱出が良い手なのだろう。

「なぜお主らあ咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ……?」

それは今問題じゃない。まあ、強いて答えるなら、『慣れ』だろう。

「仰々しくぞろぞろと。いったい何の真似だ?」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるというのに」

集団の中から一步前に出て高圧的に言い放ったのはCクラスの代表の小山さんだ。

「犯人？犯人ってなんのことさ？」

「コレのことよ」

ここからじゃよく見えない。いったい何だ？

「…………CCDカメラ小型集音マイク」

お、ナイス解説だムツツリーニ。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

なるほど、盗撮か。

「え！？それって盗撮じゃないか！一体誰がそんなことを」

「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことをするっていうの？」

「異議あり！」

そろそろこのバカみたいな状況を打破するために押し入れの中から飛び出した。

ちなみに今の僕のポーズは思いっきり指を指している格好だ。

「一つ聞くけどさ、どうして明久たち以外盗撮をしないって言える

の？」

「そんなの決まってるじゃない！コイツらの生活態度が――」

「あのさ、なんでそんなものが証拠になるんだい？ハッキリ言って一つも道理にかなっていない」

「それでも、コイツらが疑わしいことには――」

「ほんとにくだらねいね。君たちは何一つ疑っちゃいない。疑うつてのはすべての可能性について考えることだ。否定的なことを信じるってことじゃない」

ああ、くだらない。全く持ってくだらねい。

「ならば美春が証言します！」

……は？

「美春はこの人たちが脱衣所に入るのを見ました」

ほう……面白い、叩き潰してやる。

「裁判長、弁護側からも証言を要請します」

「わかりました。それでは検察側は証人を入廷させてください」

ちなみに裁判長はいつの間にかいた行平だ。きちんと木槌をもっている。

（証言開始）

『あれは合宿場についてすぐのときでした』

『この旅館の中を散策していると、怪しい影を見つけました』

『その影を追っていくと、その怪しい影は脱衣所に入っていきました』

『その怪しい一団は約三分後にそこから出てきました』

『人数は三人でした。そこの三人組と同じです！』

よし、まずは気になったところを揺さぶっていこう。というか証拠品がないので『つきつける』はできない。

『その影を追っていくと、その怪しい影は脱衣所に入っていきました』

「待った！一つ聞きたいんだけど、どうしてそのとき先生を呼ばなかったの？」

「それは―――そんな暇がなかったからです！」

「異議あり！君はこうも証言している。『その怪しい一団は約三分後にそこから出てきました』と。つまりきみは三分間脱衣所の前にいたわけだ」

「ぐうっ！それは―――そうです！その人達を見張ろうとしたからです」

「異議あり！見張ろうとした、という割にはその後何もしてないよ
うだけど。少なくともそんな怪しい人物なら、先生に報告するべき
だ」

「そっ、それは―――」

よしよし、ここまではうまく攻められた。

しかし、さっきも言ったように僕は今証拠品を一つも持っていない。

これでは清水さんを犯人として告発する事はできない。

ならば、明久を助けるのを優先すべきだ。

「裁判長、ご覧も通りこの証人の証言は信用できません。再度調査
を要求します」

「そうですね、この状況では犯人のヒントすらありません。よって
弁護側と検察側に更なる調査を命じます」

よし、これでだいたいうやむやにできた。明日になったらみんな忘
れているだろう。

「よし、これでひとまずは安心―――」

僕が後ろを振り返ると、そこにはボロボロの明久と雄二とムツツリ
ーニがいた。

……いつのまに拷問されていたんだ？

第三十六問

第三十六問

「明久、大丈夫？」

「ああ、うん。心配してくれてありがとう」

それにしても、証拠不十分なのに拷問なんて、ヤツらはどうかしている。

「それにしても、今日はなんだかいつもより更に命の危機が多いよ……」

いつもよりと言っているが、いつもは命の危機がないのが普通だ。

「ところで雄二。さっきから黙っているけど、何かあったのかい？」

「……………上等じゃねえか」

少し怒りを含んだ声が響く。

「え？雄二。どうしたの？」

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやろうじゃねえか」

「まさか、本当につて……」

「ああ、そのまさかだ。あっちがそう来るなら、本当に覗いてやろうじゃねえか！」

「雄二。そんなに霧島さんの裸がみたいなら、個人的にお願いしたいんじゃない？」

確かにこのタイミングで覗きに行って成功すれば犯人までたどり着けるが、失敗すれば社会的な死だ。

「ハクは私の裸は見たいっすか？」

「うゝん、まあ………」

「良いこと聞いたっす♪」

つてうえい！？何故ここにメープルが？
ああ、僕がいるからか。

メープルは風呂から上がったばかりなのか、頬は上気していて、肌もほんのり湿っていた。

………なんというか、こう、色っぽい。

「ハク、そんなにみられると照れるっす」

「……あっ！ごめん」

いつもと違う魅力なので、までも見とれていたようだ。

「あゝ。俺たちは任務を遂行してくるから、好きにやってくれ」

「え？ ちょ待っ！」

「了解っすゝ留守番っすね？」

「……殺したいほど、妬ましい」

「ダメだよムツツリーニ。博人の邪魔しちゃ」

そういつて明久たちは速やかに部屋を出て行った。

この状況で僕を置いていかないで（懇願）。

そんな思いもむなしく、部屋の扉が再び開くことはなかった。

「さて、いい感じに二人つきりね」

「待つんだ。いつの間に僕の上に馬乗りになったんだ！？」

少なくともさっきまでは普通に目の前にいたはずだ。

「もう、あんまりさわがないでよ。先生が来ちゃうかもしれないから」

「よし、今すぐ叫ぼう」

大きく息を吸って声を出そうとするが、口を開く前にメーブルの顔が目の前にあった。

僕の口はメープルの唇にふさがれている。すぐ目の前にあるメープルの髪から、良い香りがする。

「……………ん……………ちゅ……………ふぁ……………」

ダメだ。こうなったらもう僕にはどうしようもない。せめて先生が来ないのを願おう。

二分ほど経ってキスから解放された。

「さすがにここじゃ、できるのはここまでね」

「例えどこだろうと断固拒否する」

「そんなの流れに逆らえず無駄になっちゃうのに」

……………確かに今までもそうだった。

「さて、それじゃハク。私は満足したからそろそろ帰るよ」

「あ、ちよつと待って」

「え？ やっぱりまだ足りなかった？」

ここはスルーが吉だ。

「実はね……………」

明久たちの事情説明中

「……というわけなんだ」

「わかった。じゃあ明日の入浴の時にできる限り確認してみるね」

「ありがとう」

これでメープルの協力が得られた。

男子だけで活動するより、グッと調査しやすくなるだろう。

「……………というかメープルのことだから、なにか情報をつかんで、それで僕らがどう動くかを確認しに来たんだろう。」

ちなみに、明久たちは先生達に迎撃されて捕まり、補習を受けていた。

第三十七問

第三十七問

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな；クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

「ハクと平日に一緒なんて、最高っす」

「待ってメール。僕に抱きついていたら、勉強できないと思うんだ」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同学習となっていた。

学習内容は自由で、先生や周囲に質問しても良い。要するに自習だ。

その為、机も生徒同士が向かい合う形になっている。

「でも、なんで自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

明久はこの学習形態の意図に気がついていないようだ。

「授業？そんなもんやるわけないだろ」

明久の独り言を聞きつけて、これ幸いと雄二が霧島さんを置いて明久の隣にやってきた。

「やらない？ どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるか？」

「むっ。失礼な。雄二にとってはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差ないよ」

おそらくどちらも理解できないからだろう。

「この合宿の趣旨は、モチベーションの向上なんだよ」

「つまり、AクラスはFクラスを見て、『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考えるっす。そういったメンタル面の強化がこの合宿の目的っす」

「だから、授業は問題じゃないんだよ」

僕たちの説明に、明久は納得といった顔で頷いた。

「あ、代表に楓ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

そこにある友人の声が聞こえてきた。いそいそとメーブルの隣で勉強道具を広げているのはメーブルと特に仲の良い愛子だ。最近メーブルと一緒にたまに家に遊びに来ている。

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

ニツと歯を見せて笑う愛子。その雰囲気と相まってとても爽やかそうだ。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで、好きな食べ物はシュークリームだよ」

パンチラは特技では無いだろう。

「ハク……私がやってあげるっすよ？」

「お願いだからやめて」

「そんな！ハクは私には魅力がないって言うの？」

少し目を潤ませて上目遣いで見てくる。なかなかの演技だ。

「いや、魅力たっぷりだよ」

「ありがとうございます」

適当に返事をしたからか、メープルは少し膨れていた。しょうがないじゃないか、大勢の前で本気で魅力的だなんて言うのは恥ずかしいし。

「おや、こちらはだいぶ賑わっていますね」

続いて行平も登場した。

「ああ、ちょうど良かった。少し世界史で聞きたいことがあるんだけど」

「かまいませんよ。それと、生物で聞きたいことがあるのですが？」

「うん、どこどこ？」

「ハク、私も化学で質問っす」

まずは僕から説明をするため、参考書を開く。
昔から二人に理科関係を教えているので、最適な教え方がわかる。

「同性愛を馬鹿にしないで下さいっ！」

どうしたいきなり！？

見ると、学習室のドアを清水さんが開けていた。

……………この処理は海渡任せだな。

「ほら、美春。先生に見つからないうちに帰るぞ」

「まだお姉様とーちよっ！何して……………！？」

清水さんが入ってきたことと同じ所から海渡が入ってきて、清水さん連れ帰るため、お姫様抱っこしていた。

……………あの二人はいったい何しに来たんだ？

でもまあ、これで少しは平穩が訪れるな

「ハク、言い忘れていたことがあったっす」

「なに？ 実は風呂の脱衣場に本命と思しき盗撮カメラがあったっす」

「やっぱりか。ところでメープルはそれに映ってないよね？」

「もちろんっす。私の裸はハクのものっすから」

「…………んじゃ、その話はまた後で。今は勉強しないと周りに聞かれるからね」

「まったくハクったらそんなに私の裸が……」

「僕が話があるのはカメラの方」

なんだかいつもメープルのペースに乗せられている気がする。

そのうち尻に敷かれるようになるのかな？

第三十八問

第三十八問

どうやら僕たちが話している間に、明久は大変だったらしいが、こちらとしては重要な情報を手に入れたので勘弁してほしい。

そろそろ入浴の時間で、僕たちは部屋で話し合いをしていた。

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど」

「その可能性は高いだろうな」

愛子は昼間、録音機を巧みに使っていたそうだ。

……僕もあれで結構からかわれたなあ……。

「それじゃ、工藤さんを一気に取り押さえる？」

確かにそれはうまく行けば万事解決だ。

「……………それはやめた方がいい」

しかし、それはムツツリーニの言う通り、実行すべきでない。

「やめた方がいいって、何か問題でもあるの？」

「……………チャンスは一度きり。失敗したら犯人は見つからない」
おそらくムツツリーニのこれだけの説明では、明久は理解していないだろう。

「明久。ムツツリーニが言いたいのは、もし失敗してそれをみた犯人がどうするか考えろってことだよ」

「ああ、そっか。証拠を隠滅するとか、自分を探さないように更に脅迫するとか、そういったことを考えるね」

「そういうこと」

こういった理由から、チャンスは一度きり。まあ、最終日までよく考えてから行動にうつった方が良さだろう。

「けど、あんなに怪しいのに手が出せないなんて……………」

「例の火傷の痕を確認できたら良いのじゃが……………」

それは場所が場所だけに難しいだろう。

「いっそ、怒られるのを承知でスカート捲りでもしてみる？」

「……………ヤツは、スパッツを履いている……………!」

「げ。そういえばそうだった」

というか、まだ愛子が犯人とは言えないのに、それを前提で話を進めるのはあまり良いとはいえないな。

「明久。愛子が怪しいからってあまりその情報に気をとられちゃだめだ。推測は推測の域を出ない。情報に足を掬われて犯人を逃すようじゃ本末転倒だ」

「そうだよね……となるとやっぱり風呂を覗くしかないよね……」

覗きとなると、僕は良くてもサポートしかできない。メールが怖いから。

だって覗こうとしたとかしてないとか事実に関係なく一緒に風呂を強要されるだろうし。

「けど、どうしようか？何か作戦を練らないと先生達のあの警備を突破するのは難しそうだよ」

「作戦とは言ってもやることは正面突破しかないけどね」

女子風呂の前は見晴らしの良い一本道だ。あそこを誰にも見つからず通り抜けるのはダンボールがあっても難しいだろう。

「そうだな。作戦を立てる時間もないし、基本は正面から攻める以外はないな」

雄二も僕の意見に賛同する。

午前中は自習どころじゃない騒ぎだったし、午後は明久達は点数補充のテストを受けていた。

それなので、作戦の準備をする暇がなかったのだ。

「だが、方法がないわけでもない」

「え？ 作戦があるの？」

明久は全くわからないようだが、雄二がどんな作戦を考えているか、僕には大体わかる。

「作戦なんて立派なもんじゃないがな。要するに、正面突破を成功させたらいいだけだろう？」

「いや、それが難しいから困っているんだけど……」

ここまで説明されたのにまだわかっていないのか。

「正面突破しか方法がないんだったら、その正面突破を成功させるだけの戦力を揃えればいい。ただそれだけ」

「えっと、つまり覗き仲間を増やすってことかな？」

「そうだ」

まあ、こんなじゃ作戦なんて呼べないほど単純だから、相手もそれをわかっているだろうな……。

「それじゃ、すぐにでも話をしてこないと。もうすぐお風呂の時間になっちゃうよ？」

「安心しろ。夕飯時に声はかけてある。そろそろ来るはずだ」

雄二がそういったら、タイミングをはかったようにノックの音が聞こえてきた。

「坂本、俺たちに話って何だ？」

なにやら最近F F F団とやらを立ち上げてカリスマを発揮している須川君を先頭に、Fクラスの男子がぞろぞろと部屋に入ってくる。

「良く来てくれた。実は皆に提案がある。

さすがにFクラスの全員は入りきらず、廊下にいる人もいるので、それらにも聞こえるように、良く通る声で雄二は話した。

『提案？』

『今度はなんだよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえな』

Fクラスの皆に勉強漬けはきつかったのだろう。皆疲れきっている。

「――皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ』』』

もうだめだこのクラスは。

「昨夜俺たちは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せをしていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『ふむ、それで?』

何故覗きに行ったということにツツコミが入らない!?

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷の光景だ。^{アガルタ}どうだ?」

『『乗った!』』』

これで中身はともかく仲間が増えたようだ。

「ムツツリーニ、今の時間は?」

「……………二〇一〇時」

入浴時間は前半が二〇〇〇からなので、後五分もしたらメープルは出てくるだろう。

メープルは風呂入ってもつまらないって言っていたが、僕も行平もそれに賛同している。

得意科目のメープルはFクラスの全員だろうと相手じゃないので、後五分たったらこいつらの勝率は更に大きく下がるだろう。

「今から隊を四つに分けるぞ。A班は俺に、B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリーニにそれぞれ従ってくれ」

『『了解っ!』』』

「いいか、俺たちの目的は一つ!理想郷への到達だ!途中に何があ

ろうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め！神魔必滅・見敵必殺！ここが我らが行く末の分水嶺と思え！」

『『『おおおっっ！』『』『』』』

「全員気合いを入れろ！Fクラス、出陣るぞ！」

『『『おっしやあーっ！』『』『』』』

結果は見えているので、部屋でまったりしていよう。

第三十九問

第三十九問

明久達が出陣した後、意外な来訪者が来た。

「おっすー、入るぞ」

一人目は海渡、そしてもう一人、

「し、失礼します」

清水美春さんだった。

「どうしたんだい？こんなところに来るなんて？」

僕の質問に清水さんは少し躊躇い、海渡の方を一回見た。

海渡はその視線を受けて、一回頷いた。

「実は……初日のカメラ設置は美春がやりました！すみませんでした！」

ああ、矢張か。

……ミスった、矢張さん家の政志くんじゃない。
ワンモアテイク！

ああ、やっぱりか。

まあ、大体予想はできていた。

「僕は特に謝られる必要はないよ。まあ、とりあえず先生に事情は話してもらわないとね」

さすがにカメラ設置を見逃すことはできない。

「そうだな……」

「まあ、一番楽そうな秋音姉……杉本先生に話をしてみるよ」

「ああ、助かる」

「それじゃ、明久達には僕から言っておくよ」

「何から何まですまないな」

僕だってタダでこんなことをやる訳ない。

「報酬は後々でいいからね」

「やっぱり報酬を要求するところがお前らしいというか……まあ良い。後で店に来てくれ」

もう最高だった。

ガチャ

「なんだ！？朝から明久が決まっているぞ！？持病か！？」

「ええい！落ち着くのじゃ明久！博人、西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」

「……………！（コクコク）」

「……………お前らは朝から何をやっているんだ」

「……………同感です」

本当に何がしたいんだ？

現在は朝食中で、覗きについて作戦会議をしているのだが、はっきり言って意味がない。

しかしまあ、普通にバラしても面白みがないので、後で明久と秀吉だけに教えて、雄二達はそのまま無駄な努力をしておおうと思う。

しかし、明久は演技に向いていないので、機を見て教えることにした。

「ねえハク、お願いがあるんだけど？」

自習中、メールが小声で話しかけてきた。

「うん、なに？」

「覗きの妨害、一緒にやらない？」

覗きの妨害……つまり召喚獣勝負か……明久達は今日の戦闘から外すとして、戦闘経験が積めるのは良いな。

「わかった。僕も参加するよ」

さて、これからどんどん楽しくなりそうだ。

第三十九問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1495ba/>

バカと速攻と昆虫少年

2012年1月4日09時53分発行